

鳥取県美術館フォーラム2016 倉吉会場

日 時 平成28年6月19日(日)
午後1時～午後3時
場 所 倉吉体育文化会館

○司会

皆さん、こんにちは。本日は、「鳥取県美術館フォーラム2016 みんなでかんがえる美術館の可能性」に御来場いただきましてありがとうございます。

私は、本日の司会進行を務めます鳥取県立博物館の主任学芸員、赤井あずみと申します。どうぞよろしくお願い申し上げます。(拍手)

初めに、本日の予定をお知らせいたします。主催者挨拶の後、美術館整備に係るこれまでの検討状況を御説明します。続いて、秋田公立美術大学教授、藤浩志氏より基調講演をいただきます。その後、パネルディスカッション、会場の皆様との質疑応答を行って、午後3時をもちまして閉会の予定としております。

配付資料の中にアンケートがございまして、今後の参考にさせていただきたいと考えておりますので、ぜひ御記入をお願いしたいと思います。御記入いただきましたアンケート用紙は、本フォーラム終了後に、会場出口の受け付けに回収箱を設置してございますので、御利用いただきますようお願い申し上げます。

なお、本フォーラム終了後には、美術館を考え続けるカフェプロジェクト、喫茶学芸室を会場後方に設け、皆様と県立博物館学芸員との意見交換を予定しています。御希望の方は奮って御参加ください。

本日の手話通訳を公益社団法人鳥取県聴覚障害者協会様にお願いしております。どうぞよろしくお願いいたします。(拍手)

それでは、開会に当たり、初めに主催者を代表いたしまして、鳥取県教育長の山本仁志より御挨拶申し上げます。

○山本教育長

皆様、こんにちは。県の教育長をしております山本です。本日は、「みんなでかんがえる美術館の可能性」ということで、美術館フォーラムをこの中部地区で開催させていただき運びとなりました。本当に大勢の皆様にご参加をいただき、心よりお礼を申し上げたいと思います。

この美術館の検討でございしますが、博物館は、昭和47年に総合博物館として開設をして以来、40数年になろうとしておりますが、ここ数年、いろんな課題が県民の皆さん、あるいは議会で指摘をされるということになりました。これはソフトも含め、ハードも含め、いろんな課題があるということなので、平成26年度、1年間をかけて検討委員会の皆様方に、ソフト面、ハード面、いろいろな課題を洗い出させていただいて、今後どうしていくかということを決めようということになったわけですが、その過程の中で、今の博物館は非常にいい場所にあって、多少雨漏り等があったのですが、そうしたところを改修していけばまだまだ使えるということですが、いろんな意味合いで、収蔵庫も含めて狭隘な部分がある。それは改築すれば、広げればいいという考え方もあるのですが、国の史跡の中にあるということ、それもままならぬということ、3つある部門のうち何か1つ出して解決していったらどうかという中で、当時、県民の皆様からの御要望でありますとか、アンケートの結果でありますとか、それから一番課題が多く解決できるといったようなことを総合的に勘案して、では、美術部門を独立させて整備していったらどうかということ、次のステップに進んだわけですが、そして外部の委員の方にも入っていただいて、検討委員会を開催して、美術館をつくるとした場合の基本構想の案について、これは必要性からコンセプト、そうしたところを皮切りに、どれぐらいの事業費がかかるのか、運営はどうしていったらよいかということ、これを追って検討していただいたわけですが、

ちょうど1年ぐらいになるのですけれども、その間、いろんな形で県民の皆様には情報も提供し、いろんな意見もいただいてきましたけれども、ようやくここに来て論点が大分整理されてきたという段階になりました。そうした段階で、少し今の考え方をパッケージにして皆さんに御説明をして、改めて意見をお伺いして、次のまたステップに進んでいこうということで、きょうのフォーラムを迎えることになりました。

この美術館の可能性、いろんな意味での可能性を秘めておと思いますが、きょうのテーマは地域づくりといったところの可能性について、テーマを絞ってひとつ議論をしていこうではないかということでございます。本日は、そうした意味で、造詣の深い、現在の秋田公立美術大学の藤浩志先生に御講演をいただきながら、その後、この検討委員会のメンバーとして、お忙しい中、本当に何度も鳥取に足を運んでいただいている林田会長様を初め、半田委員様、そして鳥取県の公募委員として御参加をいただいております来間委員にも、お忙しい中、きょうはおいでをいただきまして、パネルディスカッションをさせていただこうということを考えておるところでございます。

いろんな可能性を秘めたこの美術館、どう、我々、県民として活用していただけるのかということも常日ごろ考えながら検討を進めておりますが、皆さんほう側からもいろんな期待があろうかと思えます。そうしたことにつきましても最後の段階でいろいろまた皆さんのほうからも意見をいただきながら、またそれを検討に反映させていくという、こうしたオープンな手続を踏みながら、さらにさらに検討を進めていければと考えております。

きょうのフォーラムを機会に、皆様方のこの美術館に対する理解が一層深まり、そして同じ美術館をつくるのなら、県民の皆さんにしっかりと支えられ、県民の皆様のためになる、そうした美術館にぜひしたいと考えております。きょうの機会が本当に有意義なものになりますことを心より期待を申し上げまして、私からの冒頭の挨拶とさせていただきます。本日はよろしく願いいたします。（拍手）

○司会

引き続きまして、鳥取県立博物館館長の大場尚志より、美術館整備に係るこれまでの検討状況を説明させていただきます。

○大場館長

博物館長の大場でございます。この基本構想につきましては、先ほど教育長のほうが申し上げましたような経緯によりまして、昨年度から、本日コーディネーターを務めていただきます林田会長を中心といたします基本構想検討委員会というところで検討を進めさせていただいております。今日まで大分いろいろと議論していただきまして、その内容が大筋固まってまいっております。その大まかなところにつきましては、このチラシのほうにまとめさせていただいております。このチラシを見ていただきながらお話を聞いていただければと思っております。

この基本構想をまとめるに当たりましては、まず、なぜ美術館が必要なのかということから説き起こしてしていただきました。必要性という、今、なぜ美術館が必要なのかということ整理させている部分でございますけれども、ここに書いておりますようなことですが、結局、美術館というのはそもそも何のためのものかということを考えてみた場合に、観光集客、いろいろございます。経済的にもいろいろ公益をもたらすであろうということもございますけれども、そもそも本質的にはやはり人づくりのためのものではないのか。いわゆる社会教育施設、本質的にはそういうものだということ踏まえて必要性というものを考えていかなければいけない。美術というのは人間活動の文化的な結晶でございます。それに触れる。本物に触れる。本物の美術作品に触れる。そういうことで感動し、刺激され、癒される。多様な表現に触発されて、感受性、許容力、創造力、そういったものが高まっていく。美術館はそういう感受性、許容力、創造性、そういったものを育む中核拠点になるのではないかと、そういう機能が一番大事で、そのためにこそ必要とされるものではないのかということがまず1点あるわけでございます。

もう一つありますのは、人口減少時代に既に突入しております。経済成長、これからの時代、至上命題ということにできなくなってきております。そういった中で、地域社会を維持、存続させていくためには、そうした教育機能、この重要性が従来以上に高まってきているのではないかということがございます。こうした機能が十分でない地域、すなわち子供たちに感受性や許容力や創造力を育めない地域、そういった機能を欠く地域、そういった地域には当然子供たちの親も子供たち自身も移住してもこないし、たまたま今住んでいる方もいずれ出ていってしまう。そういったことを唯々諾々と受けとめていても仕方がない。そういう意味では、地域の存続、再生に必要な社会インフラだと、水道や道路と同じように必要不可欠なものだということがまず検討の根っこにあるということでございます。

そうした必要性のある施設、ではそういう施設というのはどういうことを目的として運営していかれるものとなるのかということとその下の「新しい美術館は、何をめざすのでしょうか」というところで若干整理しております。

地域独自の自然、風土とか歴史、文化、これは地域の個性の源であります。そして住民の皆さんのアイデンティティーのよりどころになるものだと考えております。美術というのは文化の一つでございますけれども、特に美術作品というのはそれを生み出した時代、地域における自然、風土、歴史、こういったものの状況を色濃く反映した文化遺産でもある。それをきちんと継承して、次の時代に伝えていくというのが地方の美術館の使命だと思っております。そうした意味で、鳥取県ゆかりの独特な美術、これを中核に据えて整備し、運営していく必要がある。そうすることによって、地に足のついた地域の個性というものを確立していくということが必要だろうと考えております。

ただ、感受性、許容力、創造性、そういったものを育むためには、鳥取県ゆかりのものだけやっていたらいいのかということ、そういうわけにはまいらないと思っております。内外のすぐれた作品、多様な作品、そういったものに触れることも重要だろうと思っております。鳥取にいながらにして、鳥取ではなかなか見られないすぐれた作品、それをじかに見る機会を県民の皆さんに提供していく。これも非常に重要なことだろうと思っております。人づくりのためにはそういう多様性に触れる機会を提供することも重要だと考えております。

さらに、最近皆さんのニーズというのは、美術館に求められることというのは非常に多様になってきております。そうしたニーズに応えながら、人づくりの機能を効果的に発揮していくということを考えますと、地域の皆さん、県民の皆さんと連携、協働していくということも非常に重要だろうと思っております。従来ともすれば美術館の中に埋もれがちだった美術館の活動、事業、そういったものを館外も含めて展開していく。従来の美術館の枠組みを飛び出して、地域と連携して、その再生の拠点となると、さらに言えば県外との交流の拠点となるというあり方、県民の皆さんに支えられて活動する、県民の皆さんと一緒に、皆さんのニーズにきめ細かく対応していく、そういったあり方も追求していくべきではなかろうかと考えておるものでございます。

では、そういった美術館であるためにはどういうことをしていけばいいのかということパンフレットのこちら側に若干整理させていただいております。「新しい美術館では、どんなことを行うのですか」という部分でございます。書いておりますように、収集、博物館では美術作品を収集、保管する、これが非常に重要な機能の一つなわけでございますけれども、そういった活動はやっぱり鳥取県ゆかりの作品を中心に行いたい。

展示、これも常設展示と企画展示と大きく2つの展示を美術館では行うわけですが、特に常設展示のほうはそういうゆかりの作品を中心にしていきたい。その際には、現在の博物館では、300平米あるいは500平米ほどの小さい展示室が常設展示用としてあるわけでございますけれども、そこでいろんな作品を展示しておりますが、今のそういう小さい展示室でやっておりまして、現在、博物館には1万点弱の美術品を収蔵しておりますけれども、これを皆さんに見ていただくのに20年かかるという状況でございます。これをもうちょっと広げまして、分野別に、洋画とか日本画、彫刻、工芸、写真といった分野ごとの展示室を設けて、それら著名作品は、前田寛治さんの作品は常に見ていただけるような格好にしたい。辻晋堂さんの作品も常に見ていただけるような状態にしたい。現在の博物館ではそれができ

ない状態になっております。前田寛治さんの作品を見に行きたいと言って来られても、常には見られない。全く見られないこともある。そういうのが今の実情でございます。それではやはり鳥取県ゆかりの作品を皆様にきちんと紹介していくことができないわけです。

さらに一方、企画展のほうでは、国内外の著名な作品も積極的に取り扱ってまいりたい。現在もそういうことには努めておりますけれども、従来以上に強力に行いたい。

さらに、まんが王国とっとりらしく、ポップカルチャーの企画展といったものを考えてまいりたいと思っております。

さらに重要なことは、教育普及活動と言われる活動でございます。博物館、美術館は、収集したものを展示しているだけと思われている方も多いかと思いますけれども、決してそれだけではございません。現在ではそれらよりもむしろというぐらい、そういう教育普及活動、具体的に言いますと体験教室とか学習講座、そういったもので皆さんに、多少人数は少なくても、深く学んでいただく。いろんなことを学んでいただく。場合によっては出かけていってそういう活動をする。そういった取り組みも非常にこれからますます重要になる。そのために専用の部屋を設けてワークショップを拡充する。あるいは次代を担う子供たちに向けて多様な企画を展開していく。場合によっては県下の小学生1学年を全員美術館のほうに招待する。そういったことも考えていく必要があるのではないかと。

さらには、県民の皆さんに作品発表の場を提供する。これも重要な役割だろうと思っております。あるいは美術図書、資料の利用も積極的にしていただけるようにする。また、先ほど申し上げましたボランティアの方に美術館の活動に積極的に参加していただく。その拠点としての機能も提供する。こういったことが重要ではないかと思っておるわけでございます。

では、そういう美術館をつくったり運営するのにどれぐらいお金がかかるのだろうかということもやはり考えていかなければいけないことでもあります。これについては、この裏側のほうをごらんいただきたいと思っております。「美術館の施設設備や運営費等の試算について」というところへまとめております。今まで申し上げたような必要な機能を果たす、そういう目的で運営される美術館であればどれぐらいの規模のものになるのだろうかということもまず考えてみまして、そのモデルを想定して、建築費を若干試算してみました。その結果、大体延べ床面積にして1万2,000平米ぐらいの施設が要るのではないかと。これはどれぐらいの大きさかといいますと、身近なところでは、お隣の鳥根県松江市にございます鳥根県立美術館が大体それぐらいの大きさの施設でございます。

そういう施設をつくるには、標準的なところで考えますと、大体70億円から100億円かかりそうだとおっしゃることでございます。こういう幅がありますのは、今後やはりいろいろ増減の要素がある。これは単なるモデルですので、もうちょっといろいろ事業費を落とす、圧縮するというのも当然考えられますし、また、資材費や工事単価が上昇して高くつくということもございます。そういったことも考えて、70億から100億という幅の中で考えておるとおっしゃることでございます。

ただ、これにつきましては、最近、財政負担への強い懸念が表明されておまして、そういうことであれば、施設規模も含めて、今度の検討委員会でも多少圧縮する案を検討していただけたらというふうにも思っております。いずれにしても、この辺はまだ決まった数字でも何でもございませんので、皆さんのお考え、皆さんの御意見を聞いていろいろ考えていきたいと思っておりますのが現在の状況でございます。

さらに、そうした施設のモデルを前提にいたしまして、先ほど申し上げました事業活動、あるいは利用者はどれぐらいの方に入っていただけるだろうかということも考えて、運営費も試算しております。鳥根県立美術館並みの規模の施設でございますので、鳥根県立美術館並みの利用者がある程度見込めばいいのではないかと。ということで、鳥根県立美術館が年間20万人ぐらいのお客さんが入っておられます。そういう前提で、ただ、20万も入ってもらおうとすれば、企画展を今みたいな回数でやってもやっていけないだろうということで、企画展を年に7回、年に7回というのはほとんどもう上限に近い数字です。大体1回の企画展を一月半ぐらいかけてやりますので、掛ける7ですから、それに前後の準備期間、あるいは撤収期間を入れますと、もうほとんどこれで1年間が潰れるという数字でございます。そ

の最大限の7回やろうということでは試算いたしますと、当然それだけ企画展をふやせば費用もかかります。年間の運営費が4億円近くかかるというのを試算しております。

ただ、これにつきましても先ほどと同様、財政負担への懸念も示されておりますので、利用見込みは本当に20万が大丈夫かという声もございます。この見直しも含めて、また圧縮を検討していただこうと思っておるところでございます。

さらに、立地場所でございます。この立地場所については、先般来申し上げてきました施設のコンセプト、あるいはそれを実践するために必要な機能、こういったことを考えると、そういうものであればどういう場所に立地すべきかということについて、「立地について」のところに書いてありますように、さまざまな人々が気軽に訪れることができるか、地域づくり、まちづくりに貢献できるか、そういった条件を検討委員会のほうで設定していただきまして、その条件に合った地域、これを県内の市町村のほうから推進していただいております。そうした候補地、全部で13出てきておりますけれども、それについて、これは検討委員会とは別に、もうちょっと立地条件に関する県内事情に精通しておられる専門家の方をお願いしまして、その専門家の方に評価委員になっていただきまして、現在、客観的な目で評価していただいておりますという状況でございます。今後、そうした委員の皆さんに専門的、客観的かつ公平に議論していただき、10何カ所のままでは県民の皆さんも施設のイメージが湧かないと思いますので、多少絞り込んでいただき、公平な場所を選定していく。最終的には検討委員会のほうでもまた改めて議論していただき、最も適切な場所を選定してまいりたいというのが今の状況でございます。

こうしたことで、場所の話がございましてけれども、何よりも県民が必要とされているよりよい美術館をつかってまいりたいということで進めてまいりたいと考えておりますので、皆さんのほうからも御支援のほどよろしくお願いいたします。

説明は以上でございます。（拍手）

○司会

続きまして、基調講演を行います。

講演をいただきますのは、美術作家、秋田公立美術大学教授、前十和田市現代美術館館長の藤浩志様です。

御講演に先立ちまして、講師の紹介を申し上げます。

藤様は、1960年、鹿児島生まれ。京都市立芸術大学在学中、演劇活動に没頭され、その後、地域社会を舞台とした表現活動を志向し、京都情報社を設立されました。京都市内中心市街地や鴨川などを使った「アートネットワーク83」の企画以来、全国のアートプロジェクトの現場で対話と社会実験を重ねられてきました。同大学院修了後、青年海岸協力隊員としてパプアニューギニア国立芸術学校に勤務され、その後、藤浩志企画政策室を設立し、各地で地域資源、適正技術、協力関係を生かしたデモンストレーションを実践されました。十和田市現代美術館館長、十和田奥入瀬芸術祭アーティスティックディレクターを経て、現在は秋田公立美術大学アーツ&ルーツ専攻教授でいらっしゃいます。

基調講演の演題は、「美術館と地域づくり～十和田市でのプロジェクトを中心に」です。藤教授、よろしく願いいたします。（拍手）

○藤氏

よろしく願いいたします。

ありがとうございます、紹介いただきまして。ちょっと間違いがありましたね。「おくいりせ」ではないですね。「おいらせ」と読みます。非常に難しい読み方で、大体僕も最初「おくいりせ」と読みましたので、大丈夫です。

去年まで実は十和田の美術館に勤めていたのですが、家は福岡の糸島というところでありまして、寂しい寂しい単身赴任で十和田のほうに行きまして、4年間いたのですが、きょうは父の日ですね。また単身赴任で、家族と過ごしたいなと思いつつも。

秋田で勤めるようになってまだ1年半ですけれども、それこそさっきの説明にもありまし

たが、美術館活動を通していかに地域の中にクリエイティビティーをつくっていくのか、もしくは活動力をつくっていくのかということをやっていたのですが、その延長でやっぱりスクール事業であるとか大学というシステムにも興味が出るようになって、東北で、なぜか知らないですけども秋田市が4年前から美術大学をつくりまして、たまたまそっちをのぞいているうちにそこに取り込まれてしまいまして、十和田と秋田を、200キロあるのですが、十和田湖を越えながら4時間かけて通っていたりしていました。

きょうはどういう話ができるかわからないのですが、僕自身が美術館に呼ばれて行ったのも、実をいうと僕自身、どちらかというところ側として、運営する側ではなくて、つくる側として20年ぐらいつと活動をやっていまして、特に地域の中で地域の人たちと一緒に協働しながら、何かおもしろい活動をいろいろつくれないかなということをやっていました。ある意味、実をいうとローカルを点々としていまして、鹿児島とか福岡もそうですけれども、全国各地のいろんな草の根的な地域の活動にかかわってやっていたのですが、僕らの中での、きょうのタイトルにもありますけれども、システムとしての美術館とありますけれども、仕組み、はっきり言って美術館なんか要らないではないかと。町にはいろんな空間がある。学校もあるし、役場もあるし、医療施設もあるし、福祉施設もある。公園もある。階段もある。砂丘もある。そういうところで美術表現、もしくはいろんな芸術的表現というのはできるではないか。そういうものをつなぐ仕組みさえできれば別に美術館とか文化ホールは要らないではないかという話もあります。それで全国各地でアートプロジェクトという形のを立ち上げて、いろいろやってくるのですが、どうしてもイベント的になってしまいます。単年度予算であるとか、予算化されるのを待っているとか、どうしても集客をしなければいけないとか、イベント化されてしまう。そうなると、だんだん続かない。継続性がなくなる。そうなってきたら、だんだんそのプロジェクトがどうなっていくかというところ、拠点を欲しがります。拠点施設をつくらうとします。福岡でミュージアム・シティ・プロジェクトというのがありましたけれども、それも10年続いたのですが、最後はやはり拠点施設をつくらうということになって、ギャラリーの運営のようなことをしました。

ところが拠点を持てば持ったで予算がかかります。運営費用が非常にたくさんかかってくる。それを稼ぐためにカフェをしなければいけない。レストラン事業をやろうかとなると、何をやっているのかわからなくなる。僕は実をいうと、両親は奄美大島の出身で、大島つむぎの製造にかかわっているところの育ちなのですが、僕自身は鹿児島市内で生まれ育ちまして、あるとき、80年代後半に実家を改装してカフェをつくりました。最初はアート施設として、結構とんがっていたアーティストみたいな感じだったので、これからのアート、パブリックアートはカフェだと思ったのです。80年代、カフェだと思って、実家の親をだまして改装して、勝手にカフェ運営をしました。やっていくと、最初はいろんな人たちがライブもします。展覧会もする。いわゆる創造拠点として、小さいですけども鹿児島県内で有名になっていって、南九州なんかでもいろんな人たちが移動するようになって、いろんな活動が始まりました。ただ、運営していくためにはやっぱり稼がなければいけない。借金もあつたし。それで、定食を出そうと。ランチを出しました。せいぜい1日に20食ぐらいのランチから始めるのですが、出るのですよね。売れるじゃないか。では50食やろう。50食やり出したらもう食堂みたいなのです。一体ここはどういう文化拠点なのだろうと。夜になるとパーティーみたいな形で、ライブをやる。飲み屋になる。何か飲み屋事業をやっているみたいな感じになって、文化はどこへ行ったんだみたいなことになっていって、7年間ぐらい経営したことがあるのですが、そうやって拠点施設をつくと運営が大変であるというのがわかる。

そうやって全国でいろいろやっているときにふと、最初、音楽ホールから絡むようになりまして、公共施設というのは実は町なかにもある。公民館施設もある。そういうところが地域のアートプロジェクトを担う現場として実はすごく役に立つのではないかなと思っているときに、たまたま十和田市が持っている美術館の管理の、最初は副館長の仕事だったのですが、そういう話が来まして、では美術館でどこまで地域の活動がつくっていくのかということを実験的にやってみようと思って入ったのが4年前でした。

いろいろ動いているうちに、いろんな活動が始まっていくので、まず、十和田の美術館の仕組みについてちょっと話をしたいと思います。非常に明るいお部屋なので、後ろのほうは映像が非常に見にくいと思うので、迷惑をかけると思いますが、おつき合ください。

活動の連鎖を誘発させるというのが最大限の僕のミッションでした。そのシステムをどうつくっていくのか。よく美術館は器だと言いますが、僕が経営しているのはシステムです。よくハードとソフトという言われ方を上の方たちはされるのですが、僕自身、80年代以降、むしろ90年代以降コンピューターを使い始めた人にとってみると、OS、オペレーティングシステムという考え方があります。実はOSが非常に重要だということです。ウィンドウズ何たらとか、Mac OSとか、iOSとか、いろいろありますけれども、OSがないといろんなアプリケーションが発生しません。活動が発生しません。ですからどういうオペレーティングシステムをつくっていくのかということが美術館の問題だと思っています。と同時に場でもあります。

まず、これは十和田の町並みの写真ですが、うちの場合は美術館というのとちょっと違ってまして、まず観光推進課の所属からできたというのがあります。観光拠点をつくりましようというのがありました。ですから世界唯一無二の観光スポットにならなければいけない。なので、まずよそにあるものだとだめだという話です。それとともに、地域の人たちが過ごせるリビングルーム的な場所、疲れたときとか、何かいい気分になりたいときとか、ちょっと苦労したときとか、もしくはお客さんがどこかから来たときに連れていくところ、大切な友人と時間を共有する特別なところとしての場所。こうやってみるとお寺に近いのですよね。僕は京都で学生時代を過ごしたので、お寺というのはそういうところだと、ある種の新しい、現代の、もしくは救いの場であるかもしれないですし、自分自身を高揚させるところかもしれない。十和田の町というのは150年の歴史しかない、もともと草原だったところ。非常に新しい、江戸時代の後半ぐらいに整備されて、かんがい用水でできた、もともと草原、田んぼがなかったところ。そこに新しくできたので、碁盤の目になってまして、一時は流通の拠点として盛んになったのですが、十和田市内はどンドンどンドン、ここは官庁街通りという国の施設、県の施設があったところですが、非常に十和田市は、当時人口5万人弱、今合併して5万人強、6万人弱ぐらいですけども、そういうものをつくらうという、この町なかの整備をしようということでやっていました。

これはエントランスにある韓国の作家のチェさんという人の作品ですけども、ビジュアルインパクト、これはすごく重要で、十和田市現代美術館をつくる時に、通常美術館なので、地方の6万人の地域につくる市の美術館ですから、しかも青森市でもないですし、十和田市なんて本当にどこからも遠い、空港から1時間以上かけないと行けないようなところですし、ちょうど電車もなくなるような、廃線になりそうなローカル線、今廃線になりましたが、そういうところにあつたのですが、インパクトをつくっていかないとそういう美術館にならないだろうと。高揚感をつくっていかなければいけない。美術館だから感覚を開放してくれるようなところでなければいけない。もちろん住民もそうですけれども、来た人たちの創造力、活動力を刺激しなければいけない。感情の醸成、これが一番、さっきの話もありましたけれども、頭をつくること、体をつくることは皆さん動かせばできるとわかっていると思うのですが、感覚をつくることは果たしてどこで教えてもらっているか。感覚。これはいいね、これは悪いね、これはおいしいね、おいしくないね、感覚で判断しないといけないことはいっぱいあると思います。周りがいいからいいと言っているわけではなくて、自分が本当にいいと思うか、おもしろいと思えるかどうか、自分が正しいと思えるかどうか、その感覚をどうやって身につけるか。これは感覚をいかに使っていくかということだと思います。そういう場所として美術館をつくらなければいけないということがありました。

構造としては、観光推進課がやっているのですが、やはり学ぶところでのレイヤー、これは多層な構造と言っています。いろんなジャンルがあつて平たくいろんな分野があるのではなくて、多層な、ミルフィーユ状にというか、重なっているものとして捉えていただきたい。立体的に考えるべきだと思っています、つくる場所も必要ですし、福祉施設としても必要ですし、観光施設としても必要、研究施設としても必要であると、もう一つ、アーカイブ、

活動をどういうふうに登録していくのかということであると、それはさっきの収蔵であるとか教育普及とか、そういう過去の美術館の概念と重なるところだと思いますが、そういうところとして、多層な構造を持つべきであるということです。単純なものではないということです。

うちの美術館はこういう形です。白い箱が15個、いっぱいありまして、これはいろんな、大小さまざまな空間があります。これはどういうことかということ、いろんな感覚、喜怒哀楽、わあっと開放されたり、ちゅうんと内側に向かう空間だったり、ばあんと、すこーんと抜けた空間であったり、そういう一つ一つの部屋が、空間が違います。多種多様な、異質な、全然別の空間の感覚を持っている。それをガラスでつないでいます。

これは昼間の風景ですが、白い箱ですけれども、夜になるとライティングがされまして、これは高橋匡太というアーティストの作品ですが、それぞれの四角い面の一つの面に1つずつ色に変化するLEDライトを仕掛けているので、じわっと一つの面がそれぞれ変化していきます。ですから、今、黄色、赤、青となっていますけれども、それが全然違う色に変わっていくのです。そういうプログラムが組み込まれていまして、これが四季、春夏秋冬で全然別のプログラムでまた色が変わっていくというふうになっていまして、これはもう一つ、さっきちょっと言わなかったのですが、都市整備、都市景観を変えていくということです。都市景観を変えていくということは、十和田市というのはそれまで全く無名だったと思います。そんなに有名ではなかった。これはビジュアルインパクトです。このイメージが世界的に広がっていきますので、この景観がある種のシンボリックなものになっていく。さっきの馬もそうですけれども、そういうことが実は建築で可能である。まだ中身の話はしていませんけれども、器の話だけですけれども、町に対するインパクト、これは全然変わってきます。建築はよく考えたほうが良いと本当に常々思っております。

これはうちの美術館の構造ですが、それぞれの空間がガラスのアプローチでつくられています。次へどう行くのか、これの考え方は、後でちょっと説明しますが、ホワイトキューブという考えがありまして、これは80年代以降、日本においてははすごく一般的になってきた考え方です。それまでは美術というと、台座の上に乗っているか、額の中に入っていたものが美術作品としてありました。ところが80年代に入って、インスタレーションという言葉聞いたことがあるかもしれませんが、ギャラリー自体を空間として、そこに物を置くことで表現していこう。実はこれはお寺では当たり前で、龍安寺の石庭のようなものです。あと三十三間堂みたいなものです。もちろん奈良の大仏みたいなものです。空間の中に何かを設置することで、体験的にその空間に取り込んでいこうと。ホワイトキューブなので、ほぼ真っ白な箱だと思ってください。そこに1つの作品を置きます。ですからうちの美術館の場合は1つの箱に1作家が1作品を置いています。ですので、ほかの作品はありません、実をいうと。ここの青い部分が常設です。この青い展示箱にはこれだけの数の、十五、六個、実際は23点ぐらいあるのですけれども、そういう作家の作品があります。

そして緑のところは市民の活動スペースだったり休憩スペースで、ピンクのところはわずか3つです。これは本当に2割にも満たない。これが企画展示室になっていまして、なぜこんなに企画展示室を少なくしたか。人口5万人の美術館でもありましたし、企画をするキュレーターもいない。学芸員もいない。なかなか予算が大変だろうということで、最初に建物の中に作品を組み込んでつくってしまおうという発想でつくったものです。これはよしあしがあります。でも企画展示室が少ないがゆえに、これは十和田市内にある美術館ですが、周辺の町、商店街、ここが見事にシャッター商店街になっていまして、そのシャッターをあけていただいて、そのシャッターの中のお店だったところ、もしくは、この町も大火があったと伺っていますけれども、十和田市もかなり大きい大火がありまして、その後、この商店街は、皆さん地下室をつくったのですよ。重要なものを入れるための。その地下室が今や使われなくなっていまして、その地下室を展示室として使っていこうという動きで、あえて企画展示室は小さくしたという話もあります。

中に入っていきます。作品を一つ一つ話をすると時間が全然足りないので、典型的なものだけ話しますけれども、これが大仏さんです。大仏さん効果です。ロン・ミュエクさんとい

う人の「スタンディング・ウーマン」というでかいおばちゃんですが、大きいほうが作品で、小さいほうが人間です。大きいおばちゃんいますかといまだに電話がかかってきます。常設があるということは作品のイメージが流通しているので、観光客が来ます。だから観光施設としてやる場合は、ビジュアルインパクトのある世界唯一無二の作品を置かなければいけないのではないかと考えております。

おばちゃん、見詰めてきます。もともとこのアーティストは映画とかの特殊メイクをやる作家だったのですが、こういう巨大化したような作品で非常に有名になりました。すごく売られています。当時、うちの美術館は建設コスト、作品を含めて12億ぐらいでできていると思うのですが、既にこのロン・ミュエクの作品だけでそれがもう上回っているのではないかなど、もちろん売らないですけれども、売らないけれども行っています。だから相当いい買い物をしたなと思っておりますが、美術作品のよさというのはそういうところです。そこは忘れないでいただきたい。価値が上がるものがある。それを読み込めるかどうかというのは、買ったときよりも高くなる可能性があるわけです。でもそこはどうかというのは、まあ売らないですがね。でも僕はよく考えます。それは美術館システムがなくなったとして、美術館が破綻したとして、なった場合、ここは跡地利用されるだろうな、そしてここが例えば役場として使われた場合、役所の中にこういう大きいものがただぼおんと立っていると相当おもしろい役所になるのではないかなとか、いろんな空間に使えるのではないかなとか、これは別の作家の作品ですけれども、こうやって全ての作品が1つずつ、体験型の作品ということになっています。

三十三間堂的なものもありまして、この右側の作品は、これはスウ・ドーホーという作家の10万個の人型でできた作品です。数がいっぱいあると、はあっともう誰でも驚く。10万個ですかみたいな感じでね。そういう作品です。人が上れる作品とか、床全体が作品になっているとか、そういうのがあります。

あと、これはカフェ空間ですけれども、カフェ空間の床もマイケル・リンという作家がつくっている。この辺が全部常設です。

途中から奈良美智さんという、青森出身なので、展覧会をやったときにこういう、これは白い壁にテープを張って描いているような、壁画のようなものなのですが、必ずこれをやります、皆さん。絶対このポーズをとって写真を撮ります。そういうのがやっぱりおもしろいですね。そういう活動をどんどんどんどん誘発させていくという意味でもおもしろいのではないかなど。

ここからが企画展の話になります。企画展示室というのは非常に小さいのですが、うちの場合、ちょっと特殊な美術館というのは、収蔵作品がない。収蔵庫がないのです。それとさっき見たみたいに部屋が分断されているので、ほかの美術館ではあり得ないことができます。というのは、これは大量の土と霧発生装置、水ですね。水と土なんて、美術館ではあり得ないですね。大量の土を持ち込んで世界地図の地形をつくって、霧発生装置をつくってみたいインストール、空間の作品をつくることができます。栗林さんという作家の作品ですけれども、こういうのをやるときに、ついでにはないですが、町なかでも同時に栗林の作品を展開して、美術館に来る人は必ず町なかも回ってもらうようにしています。それは毎回ツアーだったり、マップをつくったりしてやっています。

左下のペンギンみたいなのがいっぱい立っているやつは、こういうことも積極的にやっています、地元の企業、これはサンヨーソーイングさんという縫製工場があるのですが、そこと一緒にコラボレーションで、栗林の作品をサンヨーソーイングさんと一緒につくってもらおう。右側の下の空間は、さっき話した地下室です。もともと地下室を持っているお茶屋さん、ここは後からまた出てきますが、有名になっていますけれども、その地下室でも作品を展示する。

奈良美智展があるときは、奈良さんの作品をこうやって美術館の中にも展示しながらやるのですが、これは県立美術館と連携して、みんなで「あおもり犬」という大きい、これはうちの美術館ではなくて青森県立美術館にあるのですが、その帽子をみんなでつくってしまおうということで、大きい帽子をつくるプロジェクト。プロジェクトです、皆さん。プロジェ

クトをつくるために美術館をつくっています。運営していると思ってください。いろんなプロジェクトをつくっていきます。そこでいろんなことを巻き込んでいて、いろんな人たちと一緒につくっていくということです。

これは美術部というのを初めてつくったときのやつで、何とぜいたくな、奈良美智が、奈良美智さんは若い人に非常に人気なので、奈良美智が部長の美術部をつくりますよということで全国に呼びかけたら150人ぐらい部員の応募が来まして、書類選考で6人だけ選びまして、その6人がいろんな町なかで展覧会をやると、その監修を奈良さんがやるという仕掛けをしました。

ここから美術館の活動から一旦ちょっとだけ離れるのですけれども、僕自身がいろんなところでやっている中で、場づくり、仕組みづくりということをやっているのですが、こういう活動はすごく興味があって、全然違うところでやったことがあります。これは茅野市の美術館とか、新潟とか、北九州であるとか、やったのですが、町にいろんな市民活動として部活動的なものが多いのですけれども、部室がないということに気づいたのです。部室、クラブボックスです。大学、高校、中学校、部室があったと思います。皆さん何部に属していたかわかりませんが、実は僕にとって部室が重要だった。活動もいければ部室が重要だったと思っています。活動は町の中でやればいいのです。ホールでやればいい。劇場でやればいい。球場でやればいい。ただ、その部室として何がどうあるのかということが、町なかを見てみると部室がない。それで実験的に楠丈工房、雑木林で遊ぶとか、ぬいぐるみ工房とか、こういういろんな、豊富な材料と道具がしっかりそろっていて、もう一つ重要です。懸命につくろうとする態度。何かを一生懸命つくろうとする人がいないと、活動は発生しません。ただスペースだけつくっても、ただ場所だけつくっても、ただ材料を置いていても、道具をそろえても、何かを教えるやれという態度を持ってくる人がいるのです。そういうところがあります。それでは全然おもしろくない。その横で何かを一生懸命つくっている人がいると、そこに巻き込まれていろんな活動が発生してくるという、そういう仕掛けがないかなと思っていました。

十和田市というのは非常に、青森県ですから、冬は苦戦します。大体6万人の人口で、年間18万人、一番多いときで18万人、年間美術館に入るのですけれども、13万人、15万人、14万人とだんだん減ってきたり、震災後は減りましたが、今、14万人ぐらい、15万人行くかなという感じですが、お客さんが来られるのですが、冬はきついです。北海道で大豪雪とかになると、青森は関係ないのにお客さんが減ります。もう本当に困ったものです。逆に、お客さんが少ないときに地元の人たちに遊んでもらおうということで、「超訳びじゅつの学校」という学校のシステムをつくったのですけれども、授業があるわけでもない。そこでは部活がいっぱいあって、部室にしてもらおう。そこで市民にいろんな、募集しまして、部室でつくりたい人、どうぞ使ってくださいということで、いろんな部活動ができました。被服部とか、樹木部とか、わらで遊ぶとか、手芸系、絵画系、音楽系、ダンス系、散歩部みたいなものもあったりとか、観察部もあったりとか、いろんなものができました。それをブログにして、いろんな方たちと一緒につくっていく。誰とつくっていくのかということと、より多くの層、いろんな層の人がいるという考え方をしています。そこにより多くの興味と関心をいかにして集めるかということでやっていったのがびじゅつの学校という部活動の活動です。

このことは後でちょっと話をしますが、多層性とともに多様性というのがあります。ここが企画展のおもしろいところです。展覧会を変えると全然違う人たちの興味、関心が集まります。これはflowersという企画展で、花がテーマです。ですから花に興味のある人がいっぱい集まってきます。このときは町なかの商店街の人たちもすごく協力してくれまして、花をテーマにした洋服を店頭飾ったり、必ず花を生けてもらったり、花がテーマの雑貨を置いてもらったり、町なかでもこうして展示するのですが、いろんな活動が広がっていく。

地元で山本修路というアーティストがだんだんよく出入りするようになって、ここで田植えを市民と一緒にやりながら、お酒をつくるプロジェクト、杜氏の人と一緒に、これは美術

館が仕掛けたわけではないですが、自主的にそういう活動を始めて、町なかにあった酒屋の一角を勝手に自分のつくったお酒のプロモーションルームみたいな展示室にして、「天祈り（てのり）」という、これは2,000本限定で毎年つくっているのですが、かなりおいしく売れていく。そうやっていろいろ派生していきます。

あるときは、うちの建築の西沢立衛という建築家ですけれども、その属するSANAAという建築家の展覧会をやったのですが、やっぱり建築に興味のある人がいっぱい集まってきます。と同時に、いろんなシンポジウムとかもやったりするのですが、これはSANAAのちょうどなぜやったかというのもあるのですが、やはり美術館、建築物が町に対するインパクトを相当つくっているということで、それ以降、十和田市はいろんな建築家と公共施設をつくるようになりました。十和田市美術館から歩いて5分のところに、これまで公民館があったのですが、それを市の交流センターということで、上の写真ですけれども、隈研吾さんと一緒につくったのが市の交流センター。下の左側にあるのは教育プラザ。それまで図書館だったところを新しく作り直して、安藤忠雄と一緒につくった教育プラザです。全部これは平家です、そんなに大きい規模ではありません。公共施設からするとすごく安い規模だったのではないかと思います。

展覧会のつくり方でもう一つプラスアルファですけれども、うちは学芸員が非常に少ないということを利用して、外部のキュレーターを呼んできています。と同時に、外部の若いキュレーターを集めて、展覧会をつくるワークショップをやりまして、それでそらいろユートピア展、これあたりのもとか、次のものもそうですが、この辺は外部のキュレーターとともに、展覧会と同時に町なかでのプロジェクトをスクール事業としてつくっていくという形でやった事業です。

このときに中崎透君という看板を扱う作家が来て、この風景はちょっと独特な風景ですが、看板、飲み屋街みたいに見えますが、この看板、全部架空の看板です。ここは見事に全部がシャッター街で、シャッターが閉まったところで、全く暗い、薄暗いところですが、ある展覧会の間だけですけれども、町なかにこういうシーンが、景色が展開していくということをプロジェクトとして仕掛けたりしました。

いろんな人たちが来る。お坊さんが来てお話をすると、宗教家の人たちが集まってきます。音楽関係の人が来るとやっぱり音楽関係の人たちがいっぱい集まってきます。これは障害者の方たちと一緒にやったもの、ポコラートという展覧会ですけれども、その中でやっぱり福祉施設の人たちがいっぱい見に来られます。そうやっていろんな、これは地元の民芸というか、「繋ぐ術」という、もともと青森にある刺し子です。南部菱刺しというのとこぎん刺しという2種類が有名ですけれども、そういうものを集めまして、そこと現代美術の作家の作品とあわせたような空間をつくります。そうするとやはり手芸をやっている方とか、いろんな活動をやっている方がそこを見に来られて、そこでまた部活を、当時の部活を、市民活動スペースを生かしながら、自分たちでそこでいろんなものをつくっていくと、そういうことをやっています。

ですから企画展というのはおもしろいもので、全然違うチャンネルをやりながら、どんどんどんどん違う人たちに新しい影響を与えていくことができるのではないかなど。

美術館のみならずです。ここから先が僕が一番力を入れてやったところですが、美術館の中だけの問題ではなくて、もっと外の施設、例えば十和田湖がある。遊覧船がある。廃墟のホテルが山ほどある。文化財的な住居もある。自然環境がある。医療施設がある。福祉施設、教育施設、いろんなものが地域の中には点在してしまっていて、そういうところで活動をつないでいくための芸術祭であるとか、物語集であるとか、部活動であるとか、ツアーであるとか、そういうものをプログラムとして、つまりシステムとして組んでいっております。それが十和田奥入瀬（おくいりせ）芸術祭。済みません。ちょっと突っ込んだような形になりましたが、「おいらせ」ですね。奥入瀬（おいらせ）芸術祭です。

こういう芸術祭というフレームをやることで、まず県外に対して、世界に対しての発信力を持ちます。一つの広報的なものですね。PR事業の一つだとも言えると思います。そういうことで、いろんなデモンストレーションとして、いろんな活動ができるよというのを見せ

てきます。

これは旧笠石家住宅という文化財ですけれども、カヤぶきの、こういうところで映像作家の作品をやる。ここは年間本当に少ない入場者数しかいなかったのですが、芸術祭のときにいっぱいお客さんが来られまして、あたふたしていたのですが、こういう生活の暮らしぶりとかをいろいろ見せていく。

こちらは自然の中。奥入瀬溪流の中で作家の作品を展示する。僕が大好きな場所なのですが、こういう廃墟になったホテルがいっぱいありまして、その廃墟になったホテルにアーティストが入り込んで、そこでずっと何かいろんな空間をいじっていきます。そういう活動。

遊覧船を作家が扱い、遊覧船は、ふだん昭和の30年代ぐらいのアナウンスがずっと流れていたのですが、それをとめて、なおかつ、エンジン音もとめて、十和田湖に浮かぶ音の風景というのを一つの楽曲に見立てて、演奏に見立てて何かやるという、mamoruという作家、鳥取のほうにも来たと言いましたけれども、そういうことをやったり、もう一つ、特徴的だと思うのですが、小説家の方々、当時、これから芥川賞をとるだろうと言われていたような若い作家というか、注目の小説家たちをお呼びして、十和田湖をモチーフに、奥入瀬をモチーフに、十和田市内の平原をモチーフにして短編集をつくっていただきました。この中で、小野正嗣さんはその後芥川賞をとりましたし、小林エリカさんはちょっととれなませんでしたが、何か候補に挙がったりとか、結構おもしろい活躍される方たちが出てきました。小説家の方というのは本当に地元の歴史を、もしくはその風土を非常に文章としてあらわします。それと書籍を発行すると全国に配布できますし、なおかつずっと残っていくということで、こういう活動もすごく重要ではないかなと。

それと同時に僕らが結構重要視したのが旅です。ツアーをつくっていくという旅です。しかもアーティストとめぐる、クリエイターとめぐるツアーです。ツアーをやることで、バスツアーとかをするのですが、奥入瀬では今、コケブームです。苔ガール。コケを観察する少女たちがふえてきたというふうになっているのですが、コケに対する興味ですね。そういうものを見るためのツアー。みんな虫眼鏡を持って、2時間ぐらい歩くのですが、歩いた距離はわずか10メートルぐらいです。コケを観察して歩くわけですからね。そういうランブリングという手法が今はやり始めています。

この左下はまことクラヴというダンスチームですけれども、廃墟のホテルでダンスのパフォーマンスをやっているのですが、バスに乗ったツアーで演劇を見せる、パフォーマンスを見せるというやり方なので、ツアーに参加した人ではないと見られません。バスの中からも既にダンスは始まっているという仕掛けとか、右下はさっきの旧笠石家住宅。いろいろあるのですが、そこで昔ながらの古い十和田の町にある伝統的な食べ物を、食事をいろいろ端でもらうということです。わずか20人ぐらいですけれども、20人ぐらいだからこそこできることはいっぱいありまして、ツアーを何回もやることでその体験をふやしていく。その地域に本当に大事なものがあるとすれば、それをどういうふうに伝え、残していくのかということ、そうやって接点をいっぱいつくっていくこと、プログラムをつくっていくことで、どんどん利用していくことが重要ではないかなと思っています。

ここからは部活動の話ですけれども、美術部の次につくったのは音楽部でして、当時、「あまちゃん」がちょうどはやっていた時期で、その音楽をやっていた大友良英さんという人を呼んできて、音楽部の部長になっていただきました。音楽部の部長と美術部の部長の奈良さんが共同でイベント、音楽祭を開くということ、何で美術館が音楽祭をやるのかという話ですけれども、そういうのも仕掛けていきまして、この左側の上にある、ちょっと変な彫刻がぼんと真ん中にありますが、実は暖炉でして、岡本太郎がもう亡くなってから完成した遺作の暖炉が奥入瀬溪流ホテルというところに2つあります。森をテーマに暖炉と川をテーマにした暖炉と、2つあります。これはほとんど遺作でして、亡くなる直前につくったものですけれども、これがホテルのオーナーのオーダーで作りまして、6メートルぐらいあるすごく大きな暖炉です。今、奥入瀬溪流ホテルというホテルがやっていて、今も暖炉として使っているのですが、実はホテルが一時閉館していました。廃業されたのです。廃業されたらどうなるかということ、廃品です。当たり前ですが。6メートルもある暖炉ですからね、そ

れをどうこうという話ではないので、今、こうやって十和田市内がだんだんだんだん盛り上がって行くことによって、ホテルを新しく星野リゾートが運営することになって、今、お客さんが相当来ています。そうやって、リボンですね、新しく生まれ変わることで、もう捨てられそうになっていた美術作品が新たにもう1回保存されていくという、活用されていくということを僕らは目の当たりにしました。そうやって死んでいる作品というか、時代の流れとともに非常にもう使えなくなった、接点がなくなった作品というのがいっぱいあるのではないかな。そういうところにいろんな接点をつくっていくことも一つのすごく重要なものになっていくのではないかな。

大友さん、楽しく音楽部をやっているところですね。皆さんと一緒に盆踊りという活動をつくったりしていました。

そうすると、いろんな連鎖が出てきます。これは美術館の中ではなくて、さっき言った奥入瀬溪流ホテルの中に別の分館のようなホワイトキューブの展示室ができたり、地域の公共施設にこういう彫刻のような、モニュメントみたいなものができたり、これは町なかのツアーをするための情報誌みたいなのを、これはうちの美術館のほうですけどもつくっていたり、中学生たちがいつもよく来るのですが、そこでニュースレターみたいなことを中学生たちがつくっていたり、観光客ももちろんいっぱい来るようになって、そこで青年会議所の人たちが、地元のアーティスト、デザイナーと一緒にウマジンという何か変なキャラクターをつくりまして、ウマジンがいろんなところに出てくるのですね。何かあるたびにウマジンが町内の活動で動いていることとか、さっきのこれは松本茶舗さんですけども、そういう人がいろいろ動き出してやるとか、何かそうやって地元の人たちが非常に元気に独自の活動を始めます。そういう誘発をつくっていくことがすごく重要ではないかな。

これはB-1グランプリ、十和田、グランプリをとりましたけれども、バラ焼きゼミナールというのがあるのですが、なぜかやっぱりアートをすごく意識してまして、タキシードを着てやったりとかしている妙な活動です。

きょう最後になります、誰とつくるか、誰と過ごすかということがすごく重要ではないかな。これはマイケル・リンという作家ですね。こういうのをちょっとつくってみました。済みません、時間があれですけども、そろそろ終わりますが、いろいろな美術運動、美術の流れがあります。これは、今、大学の先生をしているのですけれども、美術の学生がそれぞれの時代でどういうことを話題にしていたかということと、実は美術館の表現のフォーマット、美術のフォーマット、システムとフォーマットというのはどんどんどんどん変化しているということを意外と皆さん、知らない方もいるのかなと、興味がある方が多いのかなと思ってちょっと書いてみました。僕は別に美術史をやっているわけでも評論家でもないのですが、これは研究者の方が本当はやるほうが正確に、よりちゃんとしたものができると思うのですが、これは僕がずっとかかわってきた美術の中で僕が感じているものです。

50年代、60年代、僕は60年生まれなので、それ以降しか知らないですし、活動を始めたのは70年代の後半なので、そこからの活動が一番詳しいと思うのですが、システムとフォーマットということをすごくやっぱり考えてしまいます。つまり美術大学、美術団体、徒弟制があったころというのは、やっぱり写実なのか、印象派なのかという、そういう絵画の描き方が問題にされていました。これは若い学生の間ですよ。そういう時期があります。

公募展が出てきてから、これは美術団体がそうです。具象なのか抽象なのかというのが話題になった時期があると思います。抽象だと何々会だよねみたいな、具象だとこっちでしょうみたいな、そういうこともあります。

立体か平面かというのが話題になった時期というのは、70年代、多分そういうのが非常に多かったと思うのですけれども、それはやはり公募展のシステムが出てきてかなり一般化したというのがあります。フォーマットを何にするのか、絵画のフォーマットにするのか、彫刻のフォーマットにするのか、あるいは工芸にするのか、それはすごく重要でした。僕は京都市立芸術大学というところの染色科、工芸専攻で染色科に入ったのですが、当時は先生から言われました。おまえはどこに行くんだ。先生がそれぞれにあったので、現代工芸なのか、新工芸なのか、伝統工芸なのか、どっちなんだ。そんなに言われてもわかりませんみた

いな話をしていたことがあります。そういうことが問題になっていました。

ところが80年代、公共美術館というのが多分多くできたのは、70年代以降から近代美術館ができていったと思います。そうやって初めて空間という概念が出てきます。その裏側には貸し画廊のシステムができてきた。つまりさっき言ったようなインスタレーション、平面を飛び越えて空間の中に何かをつくっていきこうというのが出てきたトピックが80年代。うちのころは結構これが若い学生の間で話題になっていました。

それが90年代になって、空間ではないな、場だと、サイトだと。「場の力」という本がアメリカでできて、パワー・オブ・サイト、空間というのは何の属性もないわけですけども、場には歴史があり、人がいて、そこにさまざまな人がかかわってくる。その場に対して特別なものをつくらなければいけない。聞いたことがある人がいるかどうかはわかりませんが、美術業界で普通の話ですが、サイトスペシフィックという非常に舌をかみそうな、唾が飛びそうですが、その場に特化したような作品をつくらなければいけないのではないかと言われたのが90年代の話です。

90年代から2000年にネットワークが出てきます。80年代にいろんな地域でネットワークをしていきましたというのが出てきたのですが、やはり95年以降、コンピューター、インターネットの普及以降、どんどん変わってきます。そのときのトピック、一番下の赤いところですが、ネットワークだ、システムだという話になってきます。そこにいろんなアートプロジェクトが出てきたり、地域のプロジェクトというのが出てきたりします。

アートセンターというのが89年、水戸芸術館から始まり、美術館から離れてアートセンターという考え方が出てきます。それはうちの美術館のそう。十和田アートセンターというのが正式名称で、実をいうと十和田市現代美術館というのは俗称だと言われています。愛称と言われています。

アーティスト・イン・レジデンス、だんだん後半になると片仮名がふえてきますが、滞在しながらアーティストがそこで何かをつくっていくというシステムが大体90年代の半ば以降、出てきます。90年代の最初のころは公開制作と言われていたり、アーティスト・イン・レジデンスという言葉はまだなかった時期もあります。そうやってどんどんどんどん美術の表現のフィールドと、ちょっとここに書いているのは手法ですね。ビデオを使ったり、フィルムを使ったり、ネットをやったり、そういう形でどんどんどんどん新しい手法がふえてくると。

最近おもしろい話を友達から聞いたのですが、結構ネットでも流通していたのですが、最近の小学生に大人になったら何になりたいかと聞いたそうです。昔は野球選手とか、先生になりたいとか、お嫁さんになりたいと言っていたらしいですが、上位にユーチューバーというのが入っているらしいです。知っていますか。ユーチューブ、はあ？、みたいな。何だそれ、チューブですかみたいな。ユーチューバーですよ。ユーチューバーになりたいと思って、ユーチューブというのはインターネット上で、動画のサービスですね。そこに動画をどんどん投稿して、今、若い人たちが見えています。つまりネットの中でいろいろ表現をするようなことになっているという話です。

そこで、今、2010年以降というか、震災以降どうなってきたかという、社会的課題というのがすごく大きくなってきました。今の学生も、うちの秋田公立美術大学もそうですけども、僕が教えているのはアーツ&ルーツ専攻というところですけども、そこで何をやっているかという、まずリサーチをする、地域を探っていくということから始めます。昔は自分の中から湧き出るものをつくれと言われてたのです。僕なんか、自分の中、何もねえという、空っぽの自分だみたいなのがあったのですが、今は地域の課題と向き合いながらということになっています。地域課題はいっぱいあります。貧困の問題があります。ワーキングプアがあります。もちろん原発の問題もある。放射能汚染の問題もある。環境の問題もあります。災害の問題もあります。それに対してでは僕らはどう生きるか。美術作家がギャラリーでやっていたかもしれない。昔は公園で活動していたかもしれない、前衛運動のころは。今、若い作家はどこで活動しているか。震災、被災地で何ができるかとやっている作家もいっぱいいます。人が誰も入れないような放射能汚染区域に入りながら、そこで表現、何がで

きるのかということをやっている作家もいます。表現というのはそうやってどんどんどんどん変化していく。ではそれをどういうふうに、最初の美術館の問題に戻ると、レポートしていくのか、記録していくのかということが次の問題として出てくると思っています。

今回時間がないので余り話せないのですが、作品の形態が変わっていくという上においては、僕らは結構90年代後半からこういう話をずっとしていました。デジタルアーカイブ、映像、写真、そういうのは非常にたくさんあります。昔はフィルムでした。ですから写真をいっぱい集めていた美術館があると思います。今、僕らはデジタルのものをどうしているか。ハードディスクに入れています。僕、鹿児島で水害に遭いましたから、その時期のハードディスクは全部なくなっています。データも使えません。コンピューターのちょうど移動期ですから、いろんなメディアに落としていて、昔の、皆さんも経験がありますでしょう。8ミリビデオ。もう見られないですよ。昔のVHSのビデオとか。まだ頑張っている人もいますが、VHSのテープがいっぱいあります。メディア変換というのが必要になってきます。

最近ずっと言っていたのは、僕らがアップロードできるサーバーが欲しいよねと言っています、美術館として。もしも僕がユーチューブ、例えばユーチューバーみたいにユーチューブでみんなアプローチしているけれども、ユーチューブという会社がなくなったら全部サービスがなくなります。つまりデジタルアーカイブがなくなってしまうのです。ユーチューブは無理だけれども、デジタルアーカイブも含めて、写真とか映像とかデジタルの情報をちゃんと保管してくれるところが欲しいよね。ではそれはどこがやるのだろうかという話です。それは市がやるのか、県がやるのか。別にどこでもいいのです。世界のどこかにアップロードできる拠点があったらそれでいいのです。そういうふうに僕は思っています。ですから今のクラウド上ですね。クラウドというのは、ますますわからなくなってきましたね。雲のようなデジタルの向こう側、そこに実は保管されている場所があるのです。それを次の段階でどうやって編集して次の世代に伝えていくのかというところは研究者の実は仕事であり、また次の世代の学芸員の仕事になっていくのかなと思っています。

今、こうやって見えていますけれども、多分、美術館ができるのは2020年以降かなぐらいな、わかりませんが。そうやってきたときに活動するのは、2020年、2030年に活動するのは、今の10代の子らかな。10代、20代の子らかな。それに対して、その子らが次の世代の、今生まれた、オギャーと言っているような赤ちゃんみたいな子らが、こんな美術館は古くて使えないという、もうデータもいっぱいになってだめだみたいな、そういう話をしているかもしれない。そういうふうにどんどん更新されていくものだろうなと思っています。

ちょっと時間が……。ではこの後は議論のほうに回したいと思います。（拍手）

○司会

これで基調講演を終わります。

藤先生、どうもありがとうございました。

いま一度盛大な拍手をお願いいたします。（拍手）

次のパネルディスカッションの会場準備をいたしますので、いましばらくお待ちください。

〔休憩〕

○司会

それでは、パネルディスカッションを開始いたします。

まず、壇上の皆様を紹介いたします。

コーディネーターとして、鳥取県美術館整備基本構想委員会委員長の林田英樹様。（拍手）

パネリストとして、先ほど基調講演をいただきました藤教授。（拍手）

そして鳥取県美術館整備基本構想検討委員会委員の半田昌之様。（拍手）

同じく来間直樹様。（拍手）

そして初めに御挨拶申し上げました山本教育長にお願いしております。（拍手）

それでは、コーディネーターの林田様、よろしくお願いいたします。

○林田氏

御紹介いただきました林田でございます。きょうは本当にこのようにたくさんの方が御参加くださりまして、ありがとうございます。

私どもは県立美術館整備をしていこうという検討をしております、美術館は大変重要なものであると思っておりますので、ぜひ立派な鳥取県立美術館ができますように検討を進めてまいりました。近いうちに最終報告をまとめる予定にしておりますし、別に専門委員会として候補地をどうするかという議論もしていただいているということではございますけれども、きょうは、先ほど大場館長から御説明がありましたパンフレットに書かれているような方向で、今、私どもの委員会で検討をしておりますので、これをベースにして皆様に御理解をいただくと同時に、皆様のお声を聞く機会をつくらうということで、この場が設けられたと思っております。

きのうは米子で開催をいたしまして、美術館に期待するものということで議論をいたしました。きょうの日本海新聞さんにも載せていただいておりますけれども、きのうの会では、講演をいただきました和歌山県立近代美術館の熊田館長からは、前の知事の県立美術館構想が凍結された時期がありましたけれども、それ以来、鳥取県の博物館では、美術館は凍結されたけれども、ソフトは充実をしていくということで、学芸員と購入費はしっかりそろえて活動を充実していこうという考え方で活動をされてきましたので、ほかの県の公立美術館から見るとうらやましいような状態になっているというお話がございましたけれども、そのような活動の延長線上で立派な県立博物館をつくっていただけることを期待しているというお話がございました。

それから、委員の衣笠さんからは、県立美術館としては多分47都道府県の中でほぼ最後に近い時期に整備を今、構想されているけれども、ほかの県がいろいろやっていることをぜひ参考にして、鳥取県にしかできない、鳥取県モデルというものをつくるつもりで頑張っていこうというお話がございました。

それから、半田さんからは、特にヨーロッパなどで財政状況が厳しい国々もあって、日本でも今、特に公立の美術館、博物館は財政状況が厳しいものですから、経営が厳しくて、冬の時代と言われる状態にあるのですが、同じような例がヨーロッパなどでもあるけれども、そういうところでも地域の人たちが、美術館を支えていくのは行政というよりも、やはり自分たちが自分たちで応援をしていくという気概が非常に強く残っているので、元気を持って活動していると、そういう館にぜひなっていくように頑張っていくべきだというお話もございました。

そもそも美術館がなぜ必要なのかという議論については、特に美術館が、心の豊かさを求める今の時代の中で、とても重要な役割を果たし、心の栄養とも言うべき役割を果たすようになっていくということで、特に諸外国でも芸術文化を中心にした地域振興ということが非常に大きく行われていて、巨大な美術館の建設がヨーロッパやアジアでも大変進んでいるという状況があって、美術が地域振興に果たす役割というものが大きく動いているという話もいたしました。

そういう中で、私どもとしては、美術館の果たす役割、美術館に大いに期待するという方向での議論になったわけですが、ただ、その後で御質疑がございまして、美術館を県内のどこかにつくるとしても、つくられなかったところについては非常に活動が及ばなくて差がつくのではないかと、それに対しては分館をつくるということも考えるべきではないかという御議論もございましたけれども、これについては実は委員会でも議論がございまして、県立の美術館としては一つの拠点やはり必要だと、しかし、今後の鳥取県の美術館のあり方としては、県内の幅広い地域や施設と連携、協力して、美術館活動がそういうところにも及んでいくような活動をいろいろ工夫すべきではないかと、それが鳥取県の美術館の特色の一つになるのではないかというお話がございました。

きのうはそういう議論できょうを迎えているわけですが、きょうは美術館と地域づ

くりということをポイントにしてのお話をさせていただこうと考えているわけでございます。

パネラーの皆さん方にそれぞれ御発言をいただきたいと思っておりますけれども、最初に時間のことを申しておきますけれども、実は3時若干過ぎるぐらいまでしかございません。したがって、ある程度話が整理できましたら皆様のお声も聞きたいと思っておりますので、よろしくお願ひしたいのですが、美術館と地域づくりということを議論する際には、ぜひ日本博物館協会の半田さんのほうから、今、日本の博物館が、特に地域の「対話と連携」の博物館、地域などを含めた「対話と連携」の博物館という考え方を非常に強く出していただいておりますので、そのことについての考え方と現状についてお話しさせていただきたいと思っております。

○半田氏

半田でございます。「対話と連携」の博物館というのは平成13年に標語としてクローズアップされて、その後、市民とともに作る博物館というところに動きとしては広がってまいりました。私は、今、日本博物館協会の仕事をお手伝いさせていただいておりますけれども、きょうの話題は美術館ですけれども、博物館といったときには、総合、歴史、郷土、それから動物園、水族館、植物園も入れて一つの博物館の仲間ということになります。

この博物館の歴史、日本で振り返ってみますと、そろそろ明治150年が見えてくるわけですが、ほとんどその150年の間に整備をされてきた社会教育施設ということになりますけれども、10年以上前に「対話と連携」の博物館というスローガンを掲げた背景には、日本の博物館が非常に大きな課題を抱えた時代がその背景としてあったわけです。敷居が高い、外を見ない、人が入りにくいという中で、博物館というものが社会の中でどういう存在なのか、本当に要るのか、役割自体は何なのかということが問われ始めてきた時代でもあります。

こうした中で、博物館はいろんな試行錯誤を繰り返しながら今に至っているわけですが、その中で、やはりキーワードとしては、博物館、特に県立、市町村立もそうですけれども、公立博物館は誰のものなのかということが問われている時代になってきていると思っております。鳥取県立美術館というものを考えていったときに、県立というと、あたかも県が設立するというふうに関係するかもしれませんが、きのうも申し上げましたけれども、私はぜひ、鳥取県立博物館という趣旨において、この新しい博物館の計画が進んでいただきたいと思っているわけです。

もう一つ、これは、美術館というと、「館（かん）」という字は「館（やかた）」と書きますので、どうしても箱、建物、藤さんのお話にもホワイトキューブという一つのキーワードが出てきましたけれども、それに目が行きがちですけれども、いみじくもきょうのこの催し物はフォーラムというタイトルがつけられています。二昔ぐらいの大きな博物館を思い浮かべていただければ、多くある例としては、入り口にたどり着くまで荘厳な階段がありまして、後でバリアフリーになって、どうやってスロープをつけるんだと困っちゃうような美術館、博物館が日本にも結構ありました。いわゆる殿堂型の美術館、博物館だと思いますけれども、その考え方というのは、一つは、お上がつくって、住んでいる人たち、あるいは国民に与えていく一つの殿堂的な場ではなくて館（やかた）であったという色彩が強い時代から、やはり「対話と連携」というものの中、あるいは市民とともに作る一つの博物館という概念は、やはり館（やかた）ではなくてフォーラムになっていかなければいけない。

フォーラムというのは、古代ローマにおいては人々が集まる広場でありましたし、公共的な広場という意味があります。つまり美術館というのは箱ではないと、機能であるということから、やはり発想を変えて、その広場をどうつくっていくのか。しかし、大事なコレクションを守るためには雨風を防ぐ屋根が必要だということに、藤さんの話にもありましたような、一つの中核的な、センター的な箱は必要だけれども、箱だけで美術館が機能するわけではないという、そこに利用する人たちの思い、そこから広がっていく一つの文化的アイデンティティーの集約の場という意味合いを持って、この「対話と連携」というのは、美術館だけではなくて、博物館、公民館、図書館、その他いろいろな社会公共施設、あるいは地元の事業家、学生、学校、商店街の人たちと、いろいろな人たちと連携と対話を繰り返しながらともにつくっていくという美術館になってほしいというのは日本全体の今の博物館の課

題を解決していくための一つの新しい方向だと思いますので、ぜひこの美術館の計画については鳥取モデルという新しい形を考えていただきたいと思いますと思っている次第です。

○林田氏

どうもありがとうございます。

来間さんは建築家でいらっしゃるって、米子地域を中心に、現代アートのいろんなイベントなんかもやってくださったりして、美術愛好家でもいらっしゃるのですが、今の観点からして、今の県立博物館の美術活動について御期待なり、これからのお考えがあったらお伺いしたいのですが。

○来間氏

まず一つは、きょうの藤先生のお話を伺って、とても共感できるものがたくさんありました。美術館というのは、今、半田先生のおっしゃったとおり、もともとは殿堂としてつくられて、だんだんだんだん敷居は低くなったとはいえ、やっぱりある程度専門性を持った学芸員の皆さんが企画をして、それをつくり上げたものを足を運んで見に来てもらおうと、そういった形が一般的だと思います。

一方で、この敷居をもっと下げて、きょうの十和田の美術館の事例というのは、その部分をもっともっと市民、県民の側のほうに開いていくといった活動が紹介されたと思いますが、私は、これからの美術館というのは、先ほど御講演の中でリビングルーム的な場所という表現がございましたけれども、そういった場所になっていく必要があると考えています。

リビングルームというのは、皆さんのおうちにもリビングルームに相当する場所があると思いますけれども、そこにいる目的がなく過ごせる場所という言い方ができると思います。建築においてもそういったつくり方をいたしますけれども、美術館に限らず公共というものに関して、そういった場が今求められているような気がします。殊に美術館において、作品を見る、体験するということが非常に大切ですが、市民、県民が時間を共有するというきょう表現もありましたけれども、そういった場所になったらとてもいいのかなと思っています。

○林田氏

ありがとうございます。

山本教育長は県の当局でこの問題を担当される責任者として動いていただいているわけですが、今の県立博物館の構想というのですか、美術館とは何ぞやという、どんな活動をするものかを考えるかということがいろいろあると思うのですが、今、私どもが考えているのは、基本には県にゆかりの人たち、芸術家の作品を収蔵することを基本にしながら、もっと幅広い人たちの作品も見られるような機会をつくっていく。さらに教育活動もやっていくということになるわけですが、今、藤先生に御紹介いただいたのはもっと現代美術に焦点を当てた活動だったと思いますけれども、県では、この美術館の構想の検討と同時に、実際に現代美術館についても、例えば県の藝住祭という形で地域と一緒にやってやるようなものも奨励なさったり、それから、メディアアートをまんが王国という形で漫画を振興なさったりという形で活動していらっしゃるわけですが、基本的に美術館については、その辺との関係ではどういうものを期待されているのか、そのあたりのことを整理していただけたらと思うのですが。

○山本教育長

トータルの面での御質問で、大変答えが難しい部分もあるのですが、まず第1に、議論を今までしてきていただいて、美術館の必要性等についてもしっかりと議論していただいてここまで来たのですが、いろんな施設の経費負担の話であるとか運営費の話であるとか立地の話、あと単に箱をどうするかというハードの部分がすごく重視されてきて、議論にもなっておるのですが、本当に大事なものは機能の部分ではないかなと思っています、そ

この部分で、今、一番目指す姿として、鳥取県にゆかりのある美術作家、美術作品をしっかりと蓄積、継承していく、ここはやはり鳥取県がつくる美術館としては外せない部分ではないかなと思っています。

そこを基本に押さえた上で、その次にはいろんなことが出てくると思いますが、先ほど言われたような現代的な美術を扱うことによって、次の新しい若い人の創造的な力を伸ばしていくって、次の新しい文化をつくっていくといったようなところもやはり機能としては必要だと思いますし、また、例えば県にゆかりのある、この中部地区にゆかりのある作家でいいますと、例えば、生まれは鳥取市ですが、菅楯彦さんなんかは大阪にもゆかりがあるということで、そうした人の作品の企画展を鳥取で開くことによって、大阪からも人が呼んでこられるという、そうした力も持っているのだらうと思いますが、私が考えるのは、そうした力というのはプラスアルファの部分であって、やっぱりしっかりと地元ゆかりのある作品を蓄積あるいは継承していく。それをしっかりと県民の皆さん、子供を含めて、そうした郷土の偉大な作家の作品がこの鳥取の地に残されているということのを大事にしながら、それを自分の糧にしていく。そうしたところが一番大事なのではないかなと、これは教育長という立場もあって、こういう言い方をするのですけれども、そうしたことではないかなと私自身は感じるところです。

○林田氏

ありがとうございます。

藤先生にお伺いするのですが、きのうも大阪で橋下さんが知事や市長をなさったときに、博物館などを含めた文化施設に対して本当に必要なのかという議論がいろいろあったのですが、かなり博物館とか、文化も含めて、かなりその必要性をいろいろ訴えられると同時に、いろんな活動をされることによって、地域とつながっていることを示すことによって、やはりその重要性等を認識してもらうような努力をなさったようなことがいろいろあったのですが、ただ、きのうの熊田さんの話では、ただし、地域と連携するといっても簡単ではないと、なかなか余裕がない面もあるというお話もあったのですが、実際、十和田で本当にすばらしい地域との連携ということをお示しいただいたのですが、なかなか最初、容易でなかった面もあるのではないかと思います。特に現代美術で地域とつながっていくということはなかなか容易でなかった面もあるのではないかと思います。実際に地域とのつながり、連携という面では、特に最初のあたりではどのあたりが実を結んだとお考えでしょうか。

○藤氏

十和田の場合は本当に特殊でして、できたのが、2003年に計画が始まって、2008年にできたのですが、最初は美術館つくるという話はなかったのです。パブリックアートを置いていきたいと思います、通りをどう整備していくか、町なかをどう活性化していくかという話から始まったのです。ですけれども、その中でやはり何かもっと市民の活動をつくっていくところが要るのではないかと、屋根が要るだろうとか、そういう話になった中で、アートセンターにしていきたいと思いますという構想が出てきました。

ただ、すごく特殊だというのは、美術館、二十二、三の作品がありますが、日本人作家がほんの数人。海外ばかり。ましてや青森出身の作家はいません。十和田市出身の作家なんて絶対ない。だからいきなり白い宇宙船がおりてきたようなものですよ。何なんだ、これはと。地元は反対するし、何だ、一体これはどうなんだ。ただ、できたときに、十和田の場合は、変な話ですが、歴史が非常に浅い場所だったということと、そういう文化団体というか、もちろん作家もいます。あれなのですけれども、意外とそれを受け入れた部分もあるのです。

受け入れて、当時、計画当初で4万5,000人ぐらい年間に来ればいだろうという計画を立てて設計しました。それは、ほとんど来ないだろうと言われている中で、1万5,000人ぐらいかなという予測もあったのですが、4万5,000は目指そうと。ところができてみると18万人がいきなり来て、トイレなんか足りません。行列するわけです、桜の時期は。ちなみに5月ですが、連休の時期は。そうやると、町なかもやっぱりお客さんがあふ

れてきますし、目立ってやっぱり経済効果も生まれてきますし、ばんばん全国紙で紹介されるし、十和田というところは5年たってみると住みたい町のランクにも入ってくるぐらい、そうやってイメージが変わってくることで、でもやっぱり根強く、そういうのもあって、僕自身が行って、いろんな地域との連携みたいなことを言い始めたのですが、僕自身は、きょうは地域づくりの話もちょっと本当はしたいと思っていたのですが、時間がなくてできなかったのですが、僕自身はどっちかというところのほうに興味がありまして、地域の中にいかに活動をつくっていくのかということが重要だと思っただけで、よく言われるのは、植物に例えます。植物に例えて、土があって、そこに何か種が植えられて、それで発芽するという感じですね。十和田の場合は外来種をいっぱい植えたのです。持ってきていきなり。もう自然環境からするととんでもないみたいな話なのですが、僕は、でも本来それによって刺激を受ける潜伏している種がいっぱいあると思っただけで、地元には相当表現の種がいっぱいあるわけです。ところがやっぱり地元というのは非常に田舎ですし閉鎖的でもあるから、ちょっと変なことをするとすぐ周りがうるさく言う。妙な活動はできない。潜伏しているのですよね。みんな押しえられているのです。かなり圧力を受けて、ふつふつとするけれども、変なことはできない。そういう地元の人たちのエネルギーがよそから来たばかり、宇宙船によって、どんどんだんだん爆発していくのです。によっきによっきによっきと芽吹いてくるのです。70何歳の乗馬クラブのおやじですけれども、すごい表現をし始めて、アーティストのような活動をしたり、地元でふつふつとしていて、どちらかというところ今までちょっと変わったおじさんと言われていたような人たちが、アーティストとか、外からいろんな人が来ると、おもしろい、おもしろいと言うわけです。つまりこれは興味、関心、水だと思っただけです。光を当てる役割の人がいるとすれば、これは例えばメディア、新聞であるとか学芸員とか、いろんな活動に光を与える人がいると。水がやっぱりないと育たないというので、興味、関心というのは水だと思っただけです。そういうふうにおもしろい、おもしろいと言われると、やっていいんだと思っただけで、そういう場所としてもう準備されていますから、地元で圧力を受けながらなかなかおもしろい活動をできなかった人たちがふつふつと、美術館ができて3年、4年たってくると、だんだん発芽してきます。それがまたおもしろい、おもしろいとやっていくことで育っていくと、そういうこともあるのかなと。

最近、僕自身、いろんなところで言っているのは、発酵です。発酵しなければいけない。土をつくるためにはやっぱり土の中で発酵作用がないと、土がよくなりません、いい作物とか、いいものは当然出てきませんから、きょう恐らく来ている人は、大体土系の人かなと。土系の人、風系の人、水系の人、光系の人がいると思っただけです。土系の人はどうにかその、おもしろい作物があると、ここで育ててやれ、ここでもうかってやろうと、収穫してやるぞと、それぐらいの食欲な気持ちが出て、何かを育てようとする。水の人は興味、関心を注ぐだけです。意外と何かどこかおもしろいものにまたすぐどこかへ行ってしまいます。光の人はおもしろいものがあると光を当てようとして一生懸命記事を書いたり紹介したり。風の人というのはおもしろいものがあるといろんなところに運ぼうとします。外から運んできたり、ここのおもしろいものを運んでいったりとかね。そういうのがいっぱい合わさったような泥の人もいれば、霧のような人もいれば、虹のような人もいればという、そういう話もありますけれども、いずれにしても、ちょっと話を戻して、発酵するということはすごく重要だと思っただけで、美術館は作品をつくる場所と、さっき美術館は作品を発表する場所という言い方をしたと思っただけですが、ちょっと気になっていて、美術館は開くべきですが、閉じるべきでもあるのです。発酵作用というのは閉じないといけません。だから変な意味、もしもこの地域が閉ざされた地域であると思っただけで、文化が発酵する可能性が非常に高いです。ただ、発酵しながらも、でもそれを開いていく手段を持たないといけませんし、前に出さなければいけない。でも下がらなければいけない。テンションを上げなければいけない、でもテンションを下げなければいけない。いろんなそういう精神作用みたいなことができるような、そういう場にならないと、実はいろんないい表現というのは出てこないのではないかなと思っただけで、だから地域活性化ではなくて豊穡化という言い方をしています。地域が豊穡化するにはどうしたらいいか。では発酵するためには良質の菌を育てなければいけない。

そのためにはどう閉じるのかということと同時に、どういう風を入れていくのかということも大事だろうと、それは地域づくりの上ですごく実は重要ではないかと思っていまして……。話すともまた長いですね。

○林田氏

大変おもしろいお話で、具体的でもあるからおもしろいのですが、ちょっと関連して、青森県立美術館との連携の話が出ていましたけれども、実際の御経験からして、組織が違うとなかなか一緒になって仕事をするというのは、特に美術系で、簡単でないところもあるのではないかと思うのですが。

○藤氏

そうですね。ただ、本当に、これはやっぱり人のつながりですよ。組織的にも美術館同士で連携するということがありますし、一緒に例えば青森県で芸術祭みたいなことを開きましょうみたいな話は多分あるのです。そういうときに非常に重要ですし、十和田の美術館の場合は収蔵庫を持っていないということがすごく重要でして、十和田市が十和田市として自立するためには、県立美術館にお願いだから収蔵してと頼まなければいけないのです。これはもう持っていないがゆえの連携のすごく重要な部分で、ある経済学者が助けてくださいと言ったときに初めて人は自立するという本を書いているのですが、やっぱり自立イコール周りの人にいかに助けて、助けて、助けてと言えるかどうかだと思うのです。

青森県立美術館は幸いすばらしい美術館でもありますし、収蔵庫もあるので、できればそこ本当は連携してやりたい。ただ、次の問題として、では何を収蔵するかということはすごく重要でして、それを研究する人がいなければいけない。美術館の一番重要なところはそこだと思います。今の地域の中で、今からの地域の中で、これは誰のための美術館かということがありましたけれども、これは恐らく10年後、20年後、30年後に暮らす人たちが、そのときに大人になっている人たちがより創造的に、よりよい地域の人として暮らしていけるためにつくらなければいけないとすれば、その時期にはどのようなものが保存されていて、どのような活動に編集できるのかということを考えなければいけない話ですよ。そういう連携はすごく重要だと思います。

○林田氏

来間さん、鳥取藝住祭でもかなりいろんな芽が、現代美術関係で出ておりますし、分野もいろいろ、パフォーマンスアーツ的なこともいろいろ含めて動いているのですが、どうでしょう、横の連携というのはなかなか簡単でないところもあるのではないかと思います。体験されて、いかがでしょうか。

○来間氏

昨年まで鳥取藝住祭というのが、10団体ぐらいが県内10カ所でそれぞれアートプロジェクトを運営して、それを一つの鳥取藝住祭というパッケージングで外に向けて発信していくという形でやっておりまして、私は米子でAIR475プロジェクトの運営のほうに携わったのですが、運営している皆さんは、ほかに仕事をしながらこういった活動をボランティアでやって、それぞれ10カ所で全く、パフォーマンスだったり、現代美術だったり、いろんなばらばらな動きで、映画があったり、倉吉の場合は明倫地区のほうで活動をやっているしやいましたけれども、連携というよりは、連携したような連携していないようなというか、ただ、皆が一堂に会したりとか、そういった中で、このプロジェクトは何のためにやっているのかということについては、鳥取県をよくしたいよねと、基本的にはそういうベースがあって、方向はいろいろあるけれども、そういったベースがきちっとあれば、これは連携と呼べるものかどうかはわかりませんが、手を取り合ってプロジェクトを進めていけると。自分たちも結構大変な思いをしてプロジェクトを進めるのですが、みんな結構頑張っているよな、周りも頑張っているよなと思うと、つらいけれども頑張れると。そういうのも一つの

連携なのかなとは思いました。

○林田氏

ありがとうございます。鳥取でもそういう動きが地域の中で動いているということは本当に心強いことだろうと思います。形はいろいろ変わっているかもしれませんが、いただければと思いますが、半田さんから、フォーラムというのは、箱だけではなく、活動を広げていくような、外へ出ていくような活動というお話がありましたけれども、きのうまでの話で、鳥取の新しい施設ももう少し外へ出ていくような活動をしたらどうかというお話がございましたが、いろんな例の中で参考になりそうなことがありましたらお願いできたらと思います。

○半田氏

今、県立レベルの新しい施設をつくるというのはなかなか日本の中では難しいことですが、ここ10年、15年ぐらいを振り返ってみますと、山梨県立博物館、それから三重県立博物館もそうですが、数少ない成功例としての県立施設、あそこを見てみると、つくる側がやっぱり、私、先ほど申し上げましたように、行政的なとか、政治的なところも少し入りながらも、いろんな経緯の中で県立の施設が100億ぐらいのお金を…県民は気がついてみたらできていたというつくり方をしたところは大体失敗しています。やっぱり少し長い時間をかけて、県民がその博物館、美術館に何を求めているのかという声がいかに反映されているかというのが成功の秘訣だと思います。

皆さん、きょう、藤さんのお話を聞いていて、すごくインパクトがあって、いいなと思われた方もいらっしゃると思いますが、鳥取県立博物館のイメージを考えると、きょうの藤さんのお話の中では、青森県立の近代美術館をいかにつくるかということがベースなのだろうと思うのですね。そういうところがまずあって、では例えばこの地にどういう小回りのきく特色ある鳥取県内のローカルな美術館が育っていくのかというところの基盤整備的事業でもあると思います。

ですから、私はフォーラムと申し上げましたけれども、住民との境のない全く…でいいのかといったところには、大場館長からもお話ありましたけれども、もう既に2万点のすばらしいコレクションを持っているという宝物があります。その宝物がどういうものなのかということ語らせるための学芸員という人たちもすぐれた人材がいて、調査研究をやって、保存管理をやって、後世に伝えていくという役目を既に40年間やってきているというベースがあります。これからは、そういうふうに蓄積されて、自分たちが、皆さんのものですから、前田寛治のコレクションも、学芸員たちの中に蓄積された人の力による情報というものも、全部それは県民の人たちの宝物ですから、それをどういうふうに外に情報発信していくのか。藤さんは閉ざされたと言っていましたけれども、閉ざされた空間の中ででき上がってくるものが地域の文化ですから、そこに新しい種が舞い落ちてきたときに、それがどういうふうに変化していくのかということも歴史的にちゃんと見定めながら、自分たちが閉ざされた中で鳥取というエリアがどういう文化を育んできたのか、それを博物館という機能の中でコレクションと学芸員という人材を中心としていかに掘り下げた情報を持つことができ、それをどういうふうに発信していったら、利用者と共有するのかということもきちっとしていれば、これは日本全国、またあるいは全世界に誇れる一つの美術館に育っていくという新しい可能性を非常に多く秘めていると私は思います。

○林田氏

ありがとうございました。

質疑の時間をとらないといけませんので、私からの御質問はこれで終わりにしたいと思います。教育長さん、県立博物館は今も、我々の議論の中でも大変教育活動という、特に子供たちに対する活動ということのをこれからの美術館活動としては重要な柱にする必要があるのではないかと考えてきているわけですが、博物館のほうも既に、博物館

の中はもちろん、外へも出ていただいて、いろんなところで教育普及活動をやっていらっしゃる、多分それはこれから新しい中でも重点になってくるのではないかと思います、そのあたり、教育との絡み等を含めてお話しただければ、地域との連携という意味合いも含めてお願いしたいと思います。

○山本教育長

26年度に博物館の現状、課題を洗い出していただく作業の中で、やっぱり一番指摘されていたソフトの部分というのは、博物館、今、鳥取市にありますけれども、例えば中部とか西部、そうしたところの方々の本当に役に立っているというか、活用されているかというところの部分を見れば、これは美術部門に限らないのですが、その部分をもっと力を入れて取り組んでいく必要があるという指摘をいただいている、そのことは非常に大事だと思っています。このたびも立地のところでぜひ自分のところという声をたくさんいただいていますけれども、それというのはやっぱり身近にあってほしいという部分が美術館の機能の中にどうしてもあるのだらうと思っています。例えば発表する場であったり、実際に企画展とかがあったら行きやすいほうが良いということなのですが、やはり離れた地域の人にとっても役に立つといたしますか、支えられる、そんな機能をこの新しくつくる美術館はぜひ持たねばいけないだろうということを強く思っています。

先ほど林田会長からは子供の話が出ましたけれども、やはり子供の利用を見てみても、今の博物館は東部の子供たちが中心です。それをいかに広げていくかというところで、今御議論をいただいている中には県内の小学3年生を全て招待するという事業計画も立てていただいておりますが、まず学校の先生方から、鳥取にあるすぐれた美術品のよさでありますとか、そうしたものを理解するとか、美術館は子供たちの教育にとってどういう役割を果たしている、そこに子供たちを連れていくことによってどんな力がつくのかというところをまず先生方にしっかりと理解してもらう必要があるのかなということを改めて感じておいて、その上で、鳥取の子供だったら小学校にいる間に1回は必ず行って、地元の作家の作品を見て、自分の心の中にそうした文化的な芽を育てていく、そうしたことはぜひ取り組まねばならない課題だなと改めて感じておいて、そのことはこれからもしっかりと検討委員会の皆様方にも御議論いただきたいですし、私どももしっかり取り組みたいと思っておるところでございます。

○林田氏

ありがとうございました。

余り時間がなくて、十分な御発言がいただけなくて申しわけないのですが、一応パネリストの意見交換は以上にしたいと思いますが、最後に、新しい美術館ができたとして、コレクションをどうやって充実していくかということも大変重要な問題になってくるなということも議論しているところですが、県内の作家、ゆかりの作家だけで十分かという議論も出たりしておりますけれども、新しい美術館ができたらずいぶん県民の皆さんからも御協力いただけて、寄贈とか寄託という形でいろいろ作品の充実を図るようなことにも御協力いただけるような方向性もどこかで出てこないかなと期待もしているのですが、それらは議論する時間がなくなってしまいました。

10分弱ですけれども、会場の皆さんから御意見、御質問等をお願いしたいと思います。どうぞ。

○会場発言

湯梨浜町のカワタです。冒頭の大場館長の状況説明の中で、現在、県内で推薦されている候補地として、各市町村長から出ているのが13カ所と伺いました。時間もありませんので、質問ではなくて要望として3点申し上げたいと思います。

1点目は、先月、候補地の評価委員会というのが開催されて、県下19市町村のうち6町村のみが候補地として手を挙げられたということでございます。ちなみに12カ所の内

容は、鳥取市が5カ所、湯梨浜町が3カ所、あと倉吉市が1カ所、中部では北栄、三朝が1カ所、西部のほうでは伯耆町が1カ所と、12になるはずでございます。

先月、評価委員さんのほうから、各候補地として複数箇所を推薦するのは適切ではないというびっくりした発言がありました。候補地が1カ所ですよと各市町村長に事務局のほうから依頼があれば、何も5カ所を候補地として出したり、あるいは3カ所を出したりするような市町村はありませんが、大変いろいろ御苦勞もあったり、あるいはエネルギーも使われたりして、その発言には心外だったと思います。

つきましては、そのような発言が今後あった場合に、事務局としてはどういうふうにとめられるのか。そういうことを考えたときに、やはり言いなりではなくて、各市町村長さんがせっかく貴重な候補地を出されているということ踏まえて、それを尊重して、前に進んでいくような発言であればいいですけども、適切ではないという発言に対して、私はその委員さんの発言のほうが適切ではないと感じました。これからもこの発言を一応注意していただいて、事務局のほうのかじ取りをよろしくお願ひしたいと思います。

それから、2点目は、県立美術館というふうに申し上げますけれども、鳥取県の県立美術館は平成8年7月の議会に、今から20年も前になるのですが、7月の議会、各市町村から出ました陳情書を採択されまして、本会議で可決になったところであります。鳥取市の桂見の少年自然の家の跡でございます。その後、3年ほどたってから、新しい知事さんが誕生されまして、見事にあそこはおかしいという発言の一言で、それが凍結されて、あるいはまたそれが復活されて現在に至っております。何と20年でございます。

そのようなことから、最終的に事務局としては、このフォーラムを踏まえて、県民の意見等々を全部吸い上げるような形で、事務局案として各委員会に諮られるともちろん思うのですが、あと日にちがないという日程でありますと、やはり全員協議会とか、本会議までに、県下35人の議員さんにぜひ候補地として、13カ所と申し上げますか、全部くまなく現地を見ていただきたいと要望したいと思います。

先月の説明会においては、検討委員会さんは全部現地視察を完了されたということでございましたが、県議会の議員さんが現地をくまなく視察したという情報は一度も載っておりません。ですから議員さんの声が、例えば事務局のほうでこういう案で積極的に知事のほうも美術館を検討しておりますと言うと、逆にそれはちょっと待ったという意見のほうがあるようでございまして、果たして現地を見ながらそういう発言をしておられるのかどうかということでございます。例えば鳥取市には12名の県議會議員さんがおられますが、倉吉には3名、東伯郡には3名です。仮に中部の東伯郡と倉吉市の6名が対抗しても、鳥取市の12名にははるかに及びません。そういう誘致合戦になるということは、平成8年の美術館が決まったときにも明らかであります。平成8年の誘致合戦にも北栄町でしたか、顔を出したのですが、やはり数には勝てないということもありまして決まりました。4年ほどたって、それは白紙に戻りまして、現在に至るということでございます。そういうこともありますから、ぜひ最終的に決める議員さんにも現地をつぶさに見ていただいて、いろいろな問題点を上げていただいて、それを事務局のほうにも教えていただくという情報公開をしたらいかがでしょうかと思います。

それから、3点目です。本日のフォーラムは、鳥取県美術館フォーラムとなっております。資料も鳥取県美術館フォーラムとなっておりますね。これは、パネリストの方もいらっしゃいますけれども、鳥取県美術館整備基本構想検討委員会ということで、お気づきの方もいらっしゃるかと思いますが、鳥取県立という言い方をしております。それは、やはりこれは事務局のほうで配慮したものだと思っておりますけれども、何せ運営方針が決まっております。ですから、この美術館がずっと進んでいく間に、もしかしたら直営になるかもしれない。指定管理になるかもしれない。もしくは……。

○林田氏

済みません。ちょっとほかの方のお話が……。時間がありませんので。

○会場発言

林田会長さんがおっしゃいましたが、今後は鳥取県立ではなくて、鳥取美術館ということで資料提供していただきたいと思います。まだ県立にはなっておりませんのでということで、私はフォーラムの資料を見させていただきました。

以上、要望しておきます。ありがとうございました。

○林田氏

恐縮です。御要望として承ります。

どうぞ。

○会場発言

私は倉吉に住んでおります者ですが、倉吉では地道に地域を愛して写真を撮ったり絵を描いている方が、小さな会社が提供しておられる小さな施設を利用して、細々と自分の活動を発表しておられます。また、小さな地域で気づいたこと、表現されたことを喫茶店を利用して…して、地域とつながっておられます。また、スーパーを利用して、保育園が描いた絵をスーパーのレジの後ろに張って展示しておられます。私はそれを見て、保育園の子供はすごい発想をするのだなという、地道にこつこつ活動をしている場をそういう博物館に取り入れてもらうことはできないかなと思っています。

それと、よく知りませんが、高校とか中学校も部活がありますね。それらも博物館の横で何か発表する場を設けたり、あるいは年寄りには美術教室というのがあります。それもやはり美術館の横でしていただければ、身近な存在になるのではないかなという気がしております。

それと、もう1点ですが、私、この前、院展を見に行きました。絵に全然造詣がないものですから、見てよくわからないわけです。だから裾野を広げるために、わからない者を少しでも絵に近づけるように、難しいかもしれませんが、例えばボランティアを利用して、要望があれば説明の場をとか、別室を設けて、有名というか、審査でいい点数をとったのはこういうのがあるからですよということを何かしてもらえればありがたいなと思いました。

それと、余りずるずるずると歩いて、単に絵を見ていくような場ではなくして、皆がたむろして座って評価したり何かしている、そういう場があるほうがにぎやかになったり楽しいなという感想を持たせていただきました。

○林田氏

ありがとうございます。

時間が余りなくなってしまうました。もうお一人ぐらい御意見がございましたら伺いたいと思いますが、いかがでしょうか。

どうぞ。

○会場発言

倉吉市のスギヤマでございます。誰しも皆さん地元につくっていただきたいというのが本音だろうと思います。私もそう思いますし。今、候補地がいろいろ上がっているとは思いますが、先ほども候補地の話がありましたけれども、簡単に言えば、東、中、西それぞれ自分のところにつくっていただきたいという希望を出しておられます。それで、立地面からいけば、私の認識ですけれども、米子の方は、もしつくるのであれば、例えば鳥取にできてしまえば遠くなるということがありまして、それだったら鳥取県の真ん中の中部がいいのではないかという意見があると聞いております。そういう地の利からいってもこの中部がいいのではないかと思います。私も倉吉の出身ですから、地元につくっていただきたいという希望はあります。

それで、倉吉は、先ほど十和田市の話がありました。いいアイデアだなと思って聞かせていただいたのですが、要するに町全体が、建物をつくって、美術館だけが見る場所ではなく

て、町全体を美術館として捉えていく。すごい発想だなと思いました。そういう捉え方をすれば、中部といっても北栄町も手を挙げておられますけれども、倉吉はいろんな地域にアート作品が置いてあるのです。そういったことから、アート作品と関連して、これからの美術活動に向けてもらいたいと思いますし、それと、いろんな人がたくさん来られた場合に、トイレの話がありましたけれども、トイレも倉吉はたくさんあちこち整備されておりますし、そういういろんな面からいけば倉吉がいいのではないかなと自信を持っております。鳥取県だけの美術館ではない、全国から来ていただきたいという思いがありますけれども、そういう立地面からいって、これは要望になりますけれども、ぜひともお願いしたいなとお願いしておきます。

○林田氏

ありがとうございます。時間が余りなくて、本当に申しわけありません。場所の問題等については、この後、県の博物館の関係者が残ってお話を伺うことになっておりますので、ぜひそちらでもお願いしたいと思っておりますけれども、とりあえず……。

○司会

以上をもちましてパネルディスカッションを終わらせていただきたいと思います。
会場の皆様からの御意見、御質問はまだ尽きませんが、閉会の時間となりました。
パネリストの皆様には、この後のスケジュールの都合上、ここで退席していただきます。
皆様からまだ十分に御意見等が伺えておりませんので、パネリストの皆様にかわりまして、
県立博物館の館長と学芸員のほうが皆様からの御意見、御質問をお受けいたします。
それでは、ここで退席されるパネリストの皆様には拍手をお願いいたします。（拍手）

○大場館長

お帰りの方は、一旦、公式には終わりましたので、いろいろまた御意見をいただける方は残っていただいて、また引き続きで言っていただければと思います。
もしもっとお話をしたいという方がおられたら、ある程度帰られると思うので、前のほうに来ていただいてもいいのかなと思います。もうちょっと距離を縮めて意見交換ができたらいいなと思っております。マイクはうちの者がお持ちします。
では引き続き御意見のある方は、挙手いただければマイクをお持ちしますので。どんなことでもいいと思っておりますので。

○会場発言

もし時間があつたら、先ほど言いたかったのですが、先ほどの話の中で私になるほどと思ったのは、多様性ということと、部活動方式、この2つです。実は日本海新聞にこの間載せられた投稿で、美術とまちおこしは別ものだといって元学芸員の方が記事を書かれてまして、えっと、こういう方は早々に退任していただいて、美術館、今の構想にかかわっていただく必要はないのではないかと思ったのですが、そういう考えはまだ関係者の方に多いと思います。根強いと思います。建物があって作品があれば、美術館はそれで成立するという考え方ではないということの一つ、これは多様性という意味合いからいくと、そういうことではないかと思っております。

それと、鹿野町が似たようなことを既にやっているのです。御存じですよ。鹿野町。まちおこしという観点で、鹿野町が外部から芸術家の卵の人たちを呼んでいろいろやっています。空き家を活用したり。でもこれは美術館構想ではなくてまちおこしですね。その鹿野町の方が言うておられたのは、気高郡鹿野町のときは、直接県と話をしますから、話が早かった。鳥取市気高町になってから話が全然進まない、返事が返ってこないという話を聞きまして、これは仕方ないのしょうけれども、行政が絡むというのは多分にそういう要素が出てきますので、本来的な意味とか目的からちょっと違った力が加わると。こういったところを注意していただきたい。

それと、部活動方式では、私が思うのは、県下各市町村に文化団体協議会というのがあります。御存じですよ。趣味のサークルの団体です。でも趣味が高じていけば芸術との接点というのが出てくると、そういうことですよ。裾野を広げるといえるのはそういうところがあって、これは行政が公民館活動とか生涯学習、先ほど教育長さんがおられたので、生涯学習の元締めは教育長さんですよ、どこでも。そういう意味で、公民館活動に対しての支援。文化団体協議会については市町村から補助が出ています。倉吉市は大変少ないと聞きました。展示会に出品するのにお金を払ってしなければいけない。そういう展示会は普通、美術展とか、そういう審査の審査料を払うのしかないので、倉吉市の連合展とかいうのは展示する人が金を払うのです。もう全く逆の流れで、今、市長さんが帰ってしまいました、聞いてほしかったです。

というふうに、文化団体協議会の活動を盛んにするということは、高齢者が生きがいを持って余生を楽しく暮らせるということになってくるわけですね。そうすると、文化がそこに当然できますから、インバウンドだけではなくて、定住者、高齢者の定住者もふえてくるという、いろんな複合的な意味合いが出てきますので、ただ、こういう話は残念ながら皆さん方に話をしてもほとんど意味がない。ここにいた人に聞いてもらわなければいけないと思ったわけです。以上です。

○大場館長

館長の大場ですけれども、今お話のあったこと、まず最初に、美術館と地域づくりは違うという新聞記事、新聞等々の話です。私もちょっと記事を定かには覚えておりませんが、記事の趣旨はそういう趣旨ではなかったように思います。ただ、地域づくりをするに当たって、そういう中で専門的な目の重要性も感じたという、そんなトーンではなかったかと思えます。そんなに地域づくりと美術館は違うというトーンではなかったかと思っております。ただ、それは別に、現在の当館の職員がやっておることでございませぬので、当館としてどうこうという話でもないと思っておりますけれども。

あと、まちづくりとの関係で、鹿野の話がありましたけれども、いわばああいう美術を取り入れた地域づくりに美術館も一緒になって取り組めるような形がいいのではないかというのがいわばきょう藤さんのほうからあったお話だと思いますので、鹿野が違うということも無いのではないのかな、ああいう形に美術館が何かかかわっていくということは、これから考えてもいいものだと思います。ただ、そのあたり、余り変なかわり方をするとというお話は御指摘のとおり、余り行政主導で進んでもという部分は確かにあると思っておりますので、その辺は注意が必要なところだと思いますが、ただ、そういう地域づくりに美術館が一緒になってやっていくという姿勢はいい部分だろうと思っております。それは、先ほどまだここにいらるときにちょっとお話しになった方もいらっしゃいましたけれども、そういうことは今後考えていかなければいけない部分だと思っております。

あと、文化団体協議会の話は、我々向けというよりはということでしたので、特にお答えはいいですかね。

あと、先般来ちょっとあったお話としまして、候補地の話がいろいろございませぬけれども、これにつきましては、いろいろお考えはあると思っておりますが、それぞれに推薦していただいております。複数はけしからんという話は確かに、我々もそんなことは言っておりませぬので、複数はけしからんということはないと思っておりますけれどもということ、いろいろ事務局としても多少考えていただくようなお話は委員に対してもさせていただいておりますし、その辺については市町村のほうからの反論といいますか、評価に対する御意見をいただいておりますので、それも踏まえて改めて評価をどうするか検討していただくように言っておりますので、今後、適切に対応していただけるものと思っております。

中部がいいのではないかというお話、かえってそういうお話が出るのは当然だと思っておりますけれども、これについて、我々もどうだこうだというのはある意味、公平に、客観的に見ていかなければいけない立場でありますので、そういう面もあると思っておりますが、また東部がいいと思っていられる方にはいらっしゃる方なりのまた言い方もありますので、その辺は

皆さんに広く納得いただけるような専門的かつ客観的な検討にある意味委ねておるところです、今の段階ではちょっとコメントは差し控えさせていただきたいと思います。

とりあえず今までのお話についてはそういうことでございますけれども。ほかには。

○会場発言

…ます。要望書を出させてもらった者の一人なのですが、要望書にはどこどこに欲しいという直接的な表現はしておりません。どういう美術館を目指すか、目指す姿に合致する場所を選んでほしいという、そういう要望の仕方をしておりますけれども、きょう来て、最初の基調講演を聞いても、よかったなと思っておりますが、本当に今、県民がこういう美術館をつくりたいなのというのが決まっているのかなという気がちょっとしています。説明いただきましたここに書いてあります。それと、きょうお話しになった藤先生のお話と照らし合わせてみますと、ちょっと方向が違うかなとどうしても感じるのですね。きょうのお話を聞いて、そういう美術館はおもしろいなと思う一面、それはこちらのほうとはちょっと合わない部分もあるので、どういう趣旨で呼びになったのか、地域づくりということが大きな話だったかもしれませんけれども、私はこんなふうに思っています。鳥取県の美術館を建てたときに、こういう美術館をつくりたいのでここに建てるように決まりましたと、それで、はい、建てました、終わりではなくて、建てたからその地域が栄えるとか、そういう話ではなくて、こういう美術館に育てていきたいと思いますという、美術館づくりと言ったら語弊があるかもしれませんが、美術館づくりに参画することで地域づくりになっていくという、そういうのがきょう聞いたお話の中で参考になることかなと感じました。

ですので、県民がこぞって、こんな美術館に育てていきたいと思う、そういうことを、できればもっと早くこういう会を開いていただいて、コンセプトが決まる前に皆さんの意見を聞かれておれば、地域のここに欲しい、あそこに欲しいではなくて、そっちのほうに先に盛り上がってしまうのではなくて、いい話が進んだのかなという気がちょっとしております。でもきょうは来てよかったと思っております。

○大場館長

県民の欲しい美術館の方向づけとちょっと違うのではないかという御意見でございます。きょうは特に地域づくりということをテーマにした関係で、その部分を強調するような結果になったかもしれませんが、冒頭の説明等で申し上げましたとおり、基本構想の柱は、基本的には鳥取県にゆかりのある美術をきちんと蓄積、継承していくこと、それと国内外のすぐれた美術を鑑賞、学習する機会を県民の皆さんに提供すること、この2つが大きな柱でございます。ただ、申し上げましたように、とにかく皆さんのニーズ、いろいろ多様なものがございまして、これからのあり方として、そういうことで、そういう活動をメインにして、館内に閉じこもってはいけません。地域や県民の皆さんと協働、連携していくというあり方、それを端的に言うと、きょうお話しいただいたような地域と一緒に、地域にいろいろ波及効果を及ぼすようなあり方、これが典型であります。きょうの議論の中でもありましたように、それを県立美術館がどこまでやれるのか。あれは市立美術館だから、2番目、3番目の美術館だからやれる話なのかもしれません。だからあのままの形で県立美術館ではやれないにしても、ああいうことを多少は考えていくことがないと、これからの皆さんのニーズにこたえていけないのではないかという意味合いで、ああいうテーマをさせていただいたということでもありますので、その辺、御理解いただきたいと思いますし、また、基本構想自体、まだ決まったわけではございません。まだ途中段階です。ある程度議論は進んできておりますが、別にそれで決まりというものではございません。皆さんの御意見を踏まえてこれからいろいろ修正する余地は、お金の面を初め、多々あると思っております。

そういう意味で、我々も議論自体は順を追ってさせていただいたつもりで、まず必要性を考えて、目的を考えて、その目的からどういう機能が要る。そういう機能の施設だったらどういう条件のところ建つべきだということで順を追ってきたつもりですので、ただ、議論としてはやっぱり場所の話がきょうも最初のほう、時間内ではそういう意見ばかり出たよ

うに、やっぱりどうしてもそこに行ってしまうというところがあって、こうなっておって、そういうこともあって、改めてそもそも考え方なり、あるいはどういう事業活動をするのか、どういう中身になるのかといったことを皆さんに知っていただきたくてこういう会を催しておりますので、御理解いただけたらと思うところでございます。

○会場発言

済みません。座ったままで言わせてください。

鳥取県民は60万切れているのですよね。そして少子高齢。高齢者のほうが多くて、子供がいない。ずっと昔、妻木晩田遺跡、あそこをゴルフ場にするという問題があったとき、最終ランナーで、もうゴルフ場が潰れるようなときに、ゴルフ場を今から妻木晩田をするとは、何という無駄なことをするのだろうと物すごく、本当もう腹に据えかねるような気持ちでしたので、無事にゴルフ場にしないで済んだことを今思い出します。

県立美術館が、この資料を見たらほかからもおくらしているみたいな感じですけども、私は、いろんなお金を使ってまちおこしをするのではなくて、今ある市立美術館、米子で4月にやって、5月に倉吉でやって、6月に県立博物館でやってというみたいに、順番に市民が移動して行って、すばらしい美術を見ることでいいのではないかと思うのです。

それで、きょうの藤さんのお話はとっても魅力がありましたけれども、あそこは県立美術館ではなくて、いけば僻地のまちおこしですから、だから何と申しますか、鳥取県は32万石の殿様の時代からの宝がいっぱいあるわけですから、それが水害とか地震に遭わないような倉庫にお金をかけて、学生たち、子供たちがすばらしい美術に触れ合うことが大切ならば、スクールバスでそれぞれ授業として追っかけていけばいいのですよ。そういうふうにして、県立美術館というものを特別するのではなくて、今、間に合っていると思います。島根県の県立美術館も、足立美術館も、加納美術館も、何かバス事故があってから経営が成り立たないと嘆いておりました。だからお金をかけて、東部だ、中部だ、西部だと争って、どこに美術館を建てたところで、やがて経営が成り立たないと言って、それを、行政委託というのですか、そういうふうに放り出すという、そういうことをするのではなくて、さっき言っていましたけれども、見てもわからないけれども、そのときに学芸員さんがこうですよ、ああですよとお話、すぐ対応できるような美術館になったらいいのではないかと考えております。

○尾崎副館長

いろいろ御意見いただきまして、それについてはお聞きしておこうと思います。

やはり美術館の必要性みたいなものは、私ども、この準備をもう2年続けております。まず最初の1年で、この博物館をどうするかということをしていろいろ、外部委員会も何回も開いて考えていきました。その結果として、美術館をつくるということについて、また去年、昨年度、1年間かけて、協議していきたく。ですから、皆さんからいろんな御意見があることは重々承知しております。もちろん場所についても含めまして承知しておりますので、そういった御意見を聞きながら、今後の委員会等に諮っていきたくと思っております。

それで、きょうは、パネラーの方が飛行機で帰られる関係で、もう少し残っていただければよかったのですが、大変申しわけなかったということと、そのかわり私どもが非常に近い距離でお話しできるかなと思って、こういう会をつくっておりますので、実はこういった会、こういった公開でやるのは初めてなのですが、出前説明会という形で、40回ぐらいかな、もう既に県内で開いております。そういったことを進めながら、私どもの思いを皆さんに伝えて、それから皆さんの思いを聞く機会というのをつくっておりますので、そういったところを御了解いただければなと思っております。

○会場発言

北栄町の者ですけども、北栄町だから北栄町に持ってこいと言うつもりはないのですが、本当に美術で見た絵があったり、そういうものがある人は、鳥取でなくても、東京でも大阪でも海外でも行くと思います。だから鳥取県でつくるのであれば、今、収蔵されているす

ばらしい宝物を、それをいかに県民の、特に子供たちですよ、子供たちに触れてもらう、あるいはじかに見て芸術のよさとか、美術のよさとかを理解してもらうようなことを考えて、新しい美術館というものをつくっていただきたいということと、それが同時に、先ほど藤先生が言われたような地域とも連携していけるようなものが必要ではないかと思えます。やっぱり美術館が建物だけで、そのときだけは皆さんが足を運んでも、次第に誰も足を運ばなくなって、建物だけが残って運営費だけかかるというのが一番最大の欠点だと思うので、その辺を、今、出前講座でいろんなところでお話ししていただいて、皆さんもいろいろ考えていらっしゃると思うのですが、建物というよりは、中のソフトをどういうふうにかかすかを十分に検討していただきたいと思っております。以上です。

○ ()

御要望はわかります。本当に何と言ったらいいのか、僕はさっきの藤さんのお話を聞いて、すごくよかったなと思っているのですが、だから中でどんなソフトを展開していくかとか、あと、地域おこし、まちおこしの話もありましたけれども、やっぱりそういうことをいろいろ、基本構想委員会とか、僕らもいつもずっと話をしているのですよね。そういう中で、今まとめつつあるものを皆さんのお手元にお配りしているのですが、せっかくこういうフォーラムの場だったので、今までちょっと考えた、思いついたことがないような発想の仕方で、藤さんはいろんなことを展開している人なのですよね。本人も言っていました、アーティストで美術館の館長をするというのは、海外だったらありますか。余りないですよ。そういう非常にやわらかい人だし、そもそも…そういう人がいわゆる館、半田さんが言っていましたけれども、本来だとすごくかたいものですよ。それをどういうふうにかかすかということ、そう、鳥取県の皆さんと一緒に聞きたいなと、僕も初めて聞くお話もありましたから、そういう機会にしたかったのですよね。

藤さんのお話というのは、あの美術館のありようというのをそっくりそのまま鳥取県内で、例えば県が、もしかしたら市が展開するというのはちょっと難しいかもしれませんが、そういうことのためにモデルとして藤さんをお呼びしたわけではなくて、彼の発想の方法とか、最後に、メタファー、例えとして、農業みたいなものですよ。植物とか。わかりやすかったし、閉じるということも大事だと、こういうこともあるのかなと思うのですよね。

僕ら、外に出ていくということで、鳥取県内で活動されているアーティストの方が中心ですが、学校にアーティストの方を招いて、僕らがコーディネートしていろいろ授業をしたりしているのです。話を聞くのは子供たちが中心です。それを何でやっているかということ、やっぱり早い段階で、アーティストはすごい、僕らでは思いつかないような発想をされますよね。そういう発想力、創造力を高めるための発想力というのを早いうちに出会ってもらいたいな、それをちょっと知ってもらいたいなという思いでしているのですが、きょうはむしろ出張、藤さんによる教室、彼は「超訳びじゅつの学校」という企画もしていました。なので、きょうはここが学校になったのかなと思っていたらなと。そういう場をやっぱりつくることで、今の、何と言ったらいいのでしょうか、場所のこともとても大事だと思います。美術館をどこにつくるか。あと、今、アートツーリズムと、きのうもお話がありました、フォーラムの中で。一つ大きい拠点をつくるだけではなくて、もうちょっと分散させたりとか、いろんな意見がある中でも、ちょっとでもやっぱりかたいのです。我々のこの位置もすごいかたい感じですよ。ちょっと一段高いところで何か対峙しているのも、大事かもしれないけれども、ちょっと何かあれだな、ちょっと思うのですが、やっぱりほぐしたいな、美術というものはやっぱり僕らをほぐしてくれるものではないかなと思っているので、その第1段階としてきょう藤さんにがつんとやってもらったところだと思います。実際、我々は、半田さん2万点とおっしゃったのですが、寄託品を含めて1万点ぐらいあるのですが、そういう非常に大事な文化遺産というものを我々が次の世代へ伝えていかなければいけないというのは揺るぎない事実で、どうしようもない。それはすばらしいことだと思いますが、けれどもそれを守り伝えていながら、例えばソフトとか、幾分そういう部分については本当に、藤さんのやっていることをそのままやるというわけではないですけども、あ

あいう発想で学芸員や、時にはアーティスト、僕らも今、入ってもらったりしていますが、本当にいろんなジャンルの人とかが入ってきて、皆さんと一緒に、地域を起こすのではなくて、皆さんも一緒になって美術館を…ことで地域も結果的には起きる、そういう状況をつくり出せたらいいなどは、館長も思っていますよね、ですよね。そんなことですよね。長くなって済みません。

○大場館長

今回、このフォーラムでいろいろ改めて必要性、目的等から説明させていただきましたのも、先ほどちょっと御意見がありましたけれども、美術館なんてつくらなくてもいいではないかという御意見が結構最近聞こえるようになってきましたので、それに対してある意味、我々はずっとそうではないということで進めさせていただいておりましたけれども、きちんとその辺をいま一度初心に立ち返って理解していただくという気持ちもあって、こういうフォーラムを開かせていただいております。それについてはいろいろ御意見があるのはわかりますけれども、我々としてはちょっと違った考え方で、やっぱり必要だろうということ考えております。

そういう意味で、そもそもそういう話が出るに至りましたのが、場所の話ばかり話題になっておるといふこともあっての話で、そういう意味で、またここでも場所の話がいろいろ出たのは非常に困ったなという感じもあったのですが、ただ、それはそれだけ皆さんが熱い思いを持っておられるということですので、それはそれとして結論を出していただきたいと思えます。

また、さっき言いましたように、この美術館のあり方等につきましては、もうちょっと砕けた形で皆さんと意見交換ができたらなということ、実は後ろのほうにカフェコーナーも設けております。そこでコーヒーでも飲みながらお話ができたらということも企画しておりますので、まだいろいろおありかもしれませんけれども、壇上、こういう我々が一段高いところにおるような形での御意見を承るといふのはできたらこの辺にさせていただいて、あとは後ろのほうに、引き続きこのメンバーもいますので、またいろいろ言っていたらと思えます。よろしいでしょうか。

○会場発言

一つ最後に。お金を使って、熊本地震の、ああいうふうになったら、それこそ32万石からの財産が大変ですから、しっかりした、災害に遭わないところに保管できる、それだけはしっかりしていただきたいと思えます。

○大場館長

承りました。検討させていただきます。

○尾崎副館長

後ろで学芸員が給仕をいたしますので、コーヒーを準備しております。どうぞ後ろで。まだ来間さんが残っていらっしゃるみたいです、よろしければ。

○（ ） それでは、県民フォーラムのほうは以上で終了とさせていただきます。どうもありがとうございました。（拍手）